

脚光の眞下の所を、下手から上手へ、轟々たる列車の音。正面を通過する際は、場内を揺るがす程に大きい響きとなり、しばらく続き、次第に小さく低くなり、上手へ遠ざかつて行く。

開幕。

中央線の勝沼邊によくある、鐵道線路添ひの貧しい農家——線路は、家の建つてゐる地盤より二三メートルも低い所を走つて居り、列車の窓から見ると、少し仰ぎ見るやうな角度で、しかも鼻の先きにその家の全體が見られる——あれである。従つて、脚光の眞下が線路になつてゐるわけで、観客席から舞臺を見るのは列車の窓から此の家を見てゐるのと同じ關係になる。

なんの曲も無くたゞ嚴丈一方に建てられて、くすぶり返つた平屋建の貧しい農家を裏の方から眞正面に見たところで、上手から言へば、通り抜けの土間、八疊位の板の間

（そのの上りばな近くに爐が切つてある）それに十疊と六疊の座敷が間の襖も無く横につゞいてゐて、六疊奥に黒くくすぶつた板戸、その奥は納戸部屋。六疊の壁に寄せて古い眞黒な、しかし曾ては立派な品だつたらしいタンス。十疊の片隅に古い小机。縁側の障子は六疊下手の二三枚をのぞいて取りはづしてあるので、これだけのガラソとした家の中が一目に見える。家の中には誰も居ない。三尺の側が八疊十疊、六疊の前にズツト有つて、その手前は裏庭。庭と云つても一本の樹も無い踏みかためた褐土の十坪ばかり。下手は隣家の菜園になつてゐて、その奥の桑畑の間から隣家の土藏の白い壁。庭の上手に堀抜き井戸。その上手奥に馬小屋。但し現在は馬は居ず、農具を入れたり湯殿に使はれてゐる。井戸の傍を抜けて母家と馬小屋の間を通つて奥へ行くと、二十歩にしてその白く乾いた路面の一部が此處からも見える縣道に出られる。母家の屋根はコケラぶきに石ころがのせてあり、馬小屋の方はいつふいたともわからぬ藁ぶき。馬小屋の手前には藁が積んであり、それに堆肥が少しばかりとかなり大きな柿の木が一本。馬小屋と柿の木との間の地面を三角形になるやうに區切つて、上手一番前寄りに、この宅地の突端（つまり小さな崖の上）線路用地との境目に立てられた黒い木柵の一部の上端が覗いてゐる。

その柿の木の下、木柵に添つて立ち、遠ざかり行く列車を見るともなく見送りながら（つまり、観客の方をまともに見ながら）、ボンヤリと立ちつくしてゐる此の家の長女お雪。銘仙の晴着に、別に化粧とでもしてゐないが抜けるやうに色の白い女。見るから

におとなしそうな——おとなし過ぎて少し煮え切らないやうな氣味がある。ツヤツヤとした高島田（と言つても田舎のことで格好はあまり良く無いが、しかしそれだけに取つて附けたやうで、顔になづまないので却つて初々しい）を重そうに、面を上げたまゝ遠くを見てゐる姿が、しばらくは人の眼に入らない位に動かない。
間……列車の去つた後、あたりの物音すべてが消えてしまつた晝さがり。

奥の縣道を上手の方から近附いて來る荷車の音と、その引手の中年のオヤヂが、間の伸びた節廻しのドウマ聲で歌ふ聲。

聲　浅間あ——山さん、——なぜ——焼け——しやんす——（荷車を引いた姿が、母家と納

屋の間の通路の奥にチラチラ見える。歌をやめ立寄り、比の家に聲をかける）吉春の旦那あ！

吉春さん！……居ねえか。吉春さん、居ねえかね？（此方のお雪は自分の考への中にひたり

込んでゐて、その聲がきこえない）おかみさん！　おかみさん！　お紋さんのコクサクさんよ！

……お紋さんのコクサクおか、ござらんかい。へえ、みんな留守だとう。　（別に用があるの

では無さそうで、とおりがゝりに聲をかけて見たゞけ。チン、チンとびつくりする位に高い音を

立てて手ばなをかんでから再び荷車を引き出す。歌の響き）裾に——お十六う——持ち——なが

らあ——（下手奥の方へ消える。それと入れ違ひに、やつぱり縣道を下手から出て來て上手へ去

つて行し學校歸りのカバンを下げた子供が一人。以下、最後まで、この縣道には時々人通り）

雪　……（まだ動かない。一つ事を繰返し繰返し思ひつづけてゐるために、まるで眼を開い

て夢でも見てゐるやうになつてゐるのである)

……そこへ縣道上手から、通路へフラリと入つて來る此の家の主人一色吉春（五十歳）。きたない野良着姿に藁草履をはいて、こげ茶色になつてしまつたカンカン帽をアミダにかぶつてゐるのがひどく間が抜けて見える。地からの小作百姓にしては身體つきがきやしやに過ぎ、物腰も言葉つきも上品で大様である。少しポツとした様な所は長女のお雪ソツクリ。それでゐてこのお雪が又、後になつて母親のお紋が出て來ると、これがやつぱり、吉春とは正反対の性質の母親にも、ハツキリどこがとは云へないが、誰が見ても疑ふ事の出來ない位に似てゐる。……吉春は兩腕を組むやうにしてふところに突込み、ノソノソ通路を歩いて、井戸の傍まで來てしばらくポカンと突立つてゐる。この人の癖で、道を歩くにも何を考へると云ふでもなく、たゞ夢の中での様にウツラウツラと無意識に運んで來たのが、今はその上に、ひどく眠いらしいので尚更ボンヤリしてゐる。……しかしやがて不意にハツとして自分が何處に立つてゐるかに氣が付き、急にキヨロキヨロと四邊を見まわす。やがて、緊張した——と言ふよりもオドオドした顔付きになつて母家の方へ抜き足で寄つて行き、首を差しのをべて母家の内部を覗ふ。……母家の内部に誰もゐないのでホツとしてその邊を見てゐたが、急にノドのかわいている事に氣付き、井戸の縁に置いてあるツルベを取る。水を汲みかけて再び氣になると見え、ツルベを握つたまゝ母屋の内部を窺つて見る。そこで誰もゐない事をたしかめ得てヤツト安心し、同時にその様な自分の姿がおかしくなり、薄笑ひを浮べ、薄笑ひを浮べながら水を

汲み上げ、ツルベの縁に口を付けて息もつかず水を飲む。

……飲み終つて、残りの水を掌に受けてプルンプルンと顔を洗つてゐる。……水を汲み上げる音で我れに返つたお雪、柵の所を離れて柿の木を廻つて来て吉春を認めるが、直ぐに聲をかけると言ふわけでも無く、しばらくそれを見つてみる。

……しきりと顔を洗ふ吉春。

雪 今歸つて來やしたの？

吉 春 プツ！（聲を聞くや相手の方は見もしないで、顔は濡れたまゝツルベは握つたまゝ、通路を七八歩縣道の方へ逃げにかゝる）

雪 ……（此方が却つてびつくりして）お父つあん、どうして——？

吉 春 （その聲でチラツと振返つて）……お雪を認めて、ホツとするのと同時にガツカリしてあゝんだ、雪……お前かあ！

雪 ……どうしたの？

吉 春 ……うむ？ うん……ハハ、なに——（ノソノソ戻つて來る。テレかくしに薄笑ひしながらツルベを井戸の縁に置く）俺あまた、フフ——（腰から手拭ひを取つて顔をゴシゴシ拭く）雪 ……こら、こんなに水が跳ねかつて——（父の手から手拭ひを取つて、その胸から膝のあたりを拭く）まるで、へえ、子供みたい……どうしたの？

吉 春 あゝに……フフ……出し抜けに聲かけるもんだ……（膝の邊を拭いてゐる娘の高島田を見てゐる）……もう、えゝよ。……髪、いつ、結ふたぐい？（お雪返事をしない）……ふむ

……驛の前の髪結ひか？

雪 （うつ向いたまゝコツクリをして） ……よんべだ。 ……わしいやだけんど、おつ母さん、
どうしても結へつて、連れてつて呉れて……。 （手拭ひを父に返す）

吉 春 （その手拭ひで、もう濡れてもゐない顔は無意識に拭きながらマヂリマヂリと娘を見る）
……ふむ……よく似合うだ。

雪 いやだ、わし……。

吉 春 フツ…… （急にまじめな眼つきになつて、島田の前髪の下から娘の顔を覗き込むやうにする）……お雪。

雪 ……。

吉 春 ……お雪よ。 ……お前、それで、えゝな？ え？ それで、えゝんぢやな。？……
（お雪返事をしない） 今日だよ。 今日が濟むと、もう後でどう思ふても、しよう無えで。

雪 （うつ向けてゐた顔をフツと上げて父を見る） ……お父つあん……なんで云ふのな、そ
んな事？

吉 春 なんてつて……俺あ、たゞ、氣になるで——。

雪 ……だつて、お父つあん、別に、悪くねえからつて——。

吉 春 （娘の視線から眼をそらして、モゴモゴと口の中で） ……そりや、うむ、小宮山は良え
家ぢやけん、そりや……なんだ、その、お前のためには——。

雪 ほんならば、なんで——？

吉 春 そりやま、その……お前がよければ、それで……たゞ、俺あ、チヨツト、……うむ。

(齒がゆい位に不得要領)

雪　　んだからさ、お父つあん……わしは……わしはなあ——。

(言つてゐるところに、母家の表戸——縣道に向つて開いてゐるのだから此處からは裏になるわけ。それまで半開きになつてゐたの——をガタビシと開ける音がして、同時に
かんだかな女の聲)

聲　　ほらほら、あんだだけ云つといたに、まだ大戸もチャンと開けずにある！(その聲で二人、ハツとして裏の入口の方へ行きかける。吉春は忽ちキョトキョトと逃げ腰になつてゐる。お雪は黙つて母家の裏口の方へ行きかける)。ホントにまあ、なんとらダラシの無え……お雪！　お父つあん、まだ戻つて來ねえかえ？　え、お雪！　(吉春、彼方を見此方を見て少しマゴマゴするが、通路の方へ出て行くと當の相手と出會ひそうなので、そちらへ行くのはやめて、柿の木の傍をすり抜けて來て、木柵越しに下の線路を見おろしたりするが、結局、行き場が無いので傍の積藁と堆把の間にしやがみ込む) お雪よ！　どげえ居るんだえ？

雪　　……あい。(母家の土間を通つて表の方へ行きかける。そこへ案の通り裏戸を開け終つたお紋(四十六七歳)が、鍬を肩に、通路をスタスタと入つて來る姿。汚いながらキリリとした野良着に、紺のモモヒキに地下足袋がよく似合ふ。やつぱり育ちの良さそうな一脈の上品さを残してゐるが、しかし、百姓仕事に身を入れはじめてから一年や二年では無いらしい事は、ガツシリとした身體つきにも見える。だが亭主の吉春をそれほどに畏怖させるほどのトゲトゲしい所はどこにも無く、井戸の方へ歩いて來ながら姉さまかぶりにしてゐた手拭を取つた顔など、毎日の野良仕事で色こそ黒いがまだなかなか美しく、情愛の探そうな顔である。たゞ、稀れに感情が

激した際不意にビツクリする程に醜い鋭い表情になることがある。語尾のハツキリした早口）
紋 ……お雪よ！ 全體お前、聲ばかりしてどこに居るだ？

雪 あい。……（土間を引返して来る）

紋 あにをマゴマゴしてんだよ？ 下駄あ持つて来ておくれ。（井戸の傍でかついでゐた鍬をおろし、地下足袋を脱いで、附いた泥を叩き落したりする。その間にお雪が下駄を持つて来る）
……それで、なにかえ、お父つあん、まだ戻らないのかえ？

雪 ……（吉春の姿が見えないので、その邊をチラリと見まわす。その吉春は堆肥のかげに坐り込んで小さくなつてゐる）

紋 袴あ借りに、又、行つたのかえ？（地下足袋の始末を終つて、ヒヨイとお雪を見る）

雪 うん、あの…（少しマゴマゴした末、ツルベの竿を擱んで、母の足を洗ふ水を汲み上げにかゝる）

紋 親子そろつてグズになりよる。これからよその家に行くと言ふのに、お前、もつとハキハキせんと、これで、他人の飯と云ふものはなかなか食つて行けんぞ。お父つあんなどに似たら大變ぢや。（しんみりと、やさしく云ひながら、お雪が汲み上げて少しづゝこぼしてくれる水を手と足に受けて洗ふ）小宮山さんぢや、幸ひしうとめさんは居ねえから良いが、弥彦さんの弟や妹が居る。小じうと一人で鬼千匹と云ふてな。わしはお前が可哀そうな氣もするが、なに、この家にかたづいて來た頃のわしの苦勞に較べりや、屁の様なもんよ。それに、なんしろ、あんだだけ先方で望んで來ての話ぢやから、お前がチャンとしてさえ居れば、なんの事もない若奥様で重い物一つ持たずに威張つて居れるわな。それを思ふとホントにヤレヤレぢや。相談すればと云つて

相談相手はなし、此處まで話を運んで来るのに、わし一人でどんだけ苦労したか知れん。お父つあんが、もう少し頼りになる人だつたら——（足を拭いて下駄をはきながら、満足そうに娘の島田の頭を見たりしてゐたが、また急に亭主の不在に小腹が立つて来る）……そら見い、いくら南のうちに手傳いに行たからと云ふて、泊りこんでしまつた上に、今日といふ大事な日にまだ戻つて來ないと云ふ人ぢやもの！ そう云ふ人ぢや。自分ちの仕事となると畑はおろか横の物をたてにも、ようせんくせに、よそのうちの加勢となるとヘイヘイ云ふて、どんな仕事でもやつてやりよる！ そいつた人よ。（云ひながら足を拭き終つた手拭ひで、ついでに、顔の黒さに較べるとビツクリする位に眞白な胸や襟足のあたりを開いてグイグイと邪慳に拭きながら、縁側の方へ。お雪はその間に母の地下足袋を持つて土間に入つて行き、爐のそばに上つて茶を入れにかゝつてゐる）第一、南も南さ、あねさんだつて、伯父さんだつて、今日の事はチヤンと知つてゐるんだから、氣を利かして、いゝかげんにお父つあんに戻るやうに、そう云つて呉れたつて罰は當らん。……なあに、フフ！（とせゝら笑ひながら縁側に腰をかける）南ぢや、こんだの話に、やきもちを焼いておるのよ！ なんしろ、へえ、村で一二と云はれる小宮山から、わざわざこの一色いっしきの家柄と、そいからお前の器量を望んで話を持ちかけて來たんだからね。クミちやんなんて、廿五にもなつて賣れ残つておる娘を持つてゐちや、あねさんもキモが煮えるのも無理あねえさ。

（そこで、お雪がゴロハチ茶碗に汲んで來たしぶ茶をグツと飲んで）あゝ、うめえ！ 雪やお前、そのビン、どうしてそんなにわざと引つ詰めるやうにするだ？（娘の姿を惚れ惚れと見る）もう少しチヤンと出して、クシでも入れて——。

雪　　んでも、頭が重うて……。

紋　せつかく三圓も出して結ふたものを粗末にしたら、もつたいたいぞ。……（茶を飲み）

フフ、南だけぢや無いさ、北のうちのものや、せいから町のお源さんまで、變なこと云いふらし
てゐるげな。こう云う事になると、親類など、かへつて他人よりあさましい。一色の本家にいよ
いよ運が向いて來たんぢやから、喜んでゐればよいに、みんな、やきもちよ、あゝ。ケツの穴の
小せえつたら！　お源さんと來たら、馬場の圭太郎さが滿洲から歸つて來たのは、どうかこう
とか——フン！　圭太郎さは、内の吉男の仲良しぢやもの、吉男が留守でも遊びに位寄るさ、な
あ。（お雪がフツと眼を伏せたの見て、その顔をさぐるやうに暫く見てゐる）………そいで、
滿洲へはいつ戻るんかなあ？

雪　……さあ……もう直ぐだろ。

紋　おキンさん云つてたが、昨日畑で、お前圭太郎さんと話してゐたと？

雪　……うむ。草取りやつてゐたら、圭太郎さん通りかつて——。

紋　どんな事話したなあ？

雪　別に……滿洲の兄ちゃんのことなんか……。

紋　そうかね。……ソデちゃん、昨日は遊びに來なかつたかえ？

雪　………（母から見詰められ、眼のやり場に困つて、茶碗を持ちツイと立つて爐の方へ
行く）

紋　（その娘の後姿をマヂマヂと見ながら、言葉はウワのそらで）お茶もう一杯おくれ。

……あれはとんだ良い娘だねえ。器量は良し、はたば機場などで働いてゐたにしちや上品だしな。第一
兩親も無いに、あゝして圭太さんと二人で小さい時からよその家の厄介者で育つたにしちや、す

なをな所がえゝな。え、お雪……（後半はなんとなく娘の氣を引いて見るやうに云ふが、お雪返事をしない）もう一杯お茶ついでおくれ。

雪 ……あい。（返事はするが動かない）

紋 ……どうした？ お前（何か云ひかけるが、フト氣を變へて）そうそう櫛を出してやるんだっけ。（上にあがつて奥の六疊の方へ行き、そのタンスの引出しから油紙の包みを取り出し）これだ、これだ。わしが此の家に来る時に實家のおばあさんが祝つて下すつたもんで、

…：ほかの物はみんな次々に賣つてしまつたが、これだけはお前の時にと思つて——（と包をガサガサ開いて櫛を取り出し、袖でこすつて見たり、光にすかして見たりしながら、お雪の方へ行く）たつた、これだけを殘して置くだけでも、わしは、どんなに苦勞したか。お父つあんは、今でこそあゝだけどな、昔はあれでお前…：なに、グズは昔つからさ。飲まないでゐればグズでゐて、さて、酒がひとたらしでも入つたとすると、まるでキチゲエだつたんだから。…：そつち向いて見な。…：（黙つて坐つてゐる娘の背後に立つて髪の形をいぢつたり、エモンを直したり、櫛を差したりしながら）そうよ、酒を飲まなくなつたゞけグズもひどくなつたけど、云つて見りやこれで、どんだけ扱ひ易くなつたか知れねえさ。昔は、ひどかつた。泣かされたものだよ。…：ホラ、本ベツコウだよ。艶が違わあ。（更に櫛を抜いてピンやタボを撫でつけてやる。黙つて、されるまゝに坐つてゐるお雪。…：間）

堆肥のかげから伸び上り伸び上りして母家の内部の様子をうかゞつてゐた吉春が、この時、母家の中が靜かになつたので、立ちあがつて、抜き足をして、通路の方へ——。

紋　　へえ、もうチツトえもんを抜くもんだ。うつ向いてごらん。（その聲で、丁度井戸の傍まで行つてゐた吉春が、ビクンとして、足早やに井戸の縁をすり抜けようとしたトタンに、身のこなしのへまき、井戸側にのせてあつたツルベに肱がさわり、ガラランガランとおつことしてしまふ。その音で）……誰？（娘の背後に立つたまゝ耳をすます）誰だよ？（吉春、この聲で動けなくなつてしまふ）……（お紋、土間に降りて出て来る。忽ち通路の奥に釘付けにされたやうに突立つてゐる吉春の背中を見出して）……へえ、あなたは、まあ……今戻んなすつたの？（意外に物柔かな調子である）

吉　春　うむ……まあ……（ビクビクしながら薄笑ひを浮べてゐる）

紋　　早くあがつて仕度をして下さらんと、もうソロソロ四時になりますよ。

吉　春　うむ……その……（しようことなしに一二歩こつちへ來ながら）

紋　　なんです？

吉　春　なんしろ……。

紋　　なんしろも、かんしろも、そのもあのもへツタクレもありますか！（とうとう爆發する）全體、今日と云ふ日を、どんな日だとあなた、思ふちよりますか？ え？ 私があいだけ云ふといったのに、南も南ですよ、親戚々と云つて、何かあるとチヨツトした事でも人を呼びつけといて、さんざんこき使ふくせに、この十年、うちでどんな困つた時にも、畑仕事の加勢はおろか、米五合、菜つぱ一本、これを食べなと云つて持つて來るぢやなし……全體、あなたの爲めには大事な叔父さんの家かも知れませんがね、私には赤の他人、いえ、赤の他人よりやまだひどい。

(速射砲の様に喋り立てる) 十年前に、北の田を賣る時にだつて、一時借金の肩代りをしてくれ。そうすりや必ずその内に利息をつけて買ひ戻すからと、私が疊に額こすりつけて頼んでも、なんだかだで聞いちや呉れず、そんなために北の田もとうとう人手に渡しちまつて、それからこつち、たんぼらしいたんぼは一枚も無くなつて、こうして百姓してゐながら——人に聞かれてもきまりの悪い、米は買つて食つてゐる有様ぢやありませんかな！ 第一、昔からの事を云へば、こつちは本家で向うは分家ですよ！ その、本家の旦那が、チョイと口先でうまい事を云はれると、ノコノコと山羊のお産の手傳ひに行くだ！ それもいいかげんにして歸つて來ればまだしもの事、泊りがけで……それも、たつた一人の娘が一生の大事な日だち云ふのに、ポカーンとして、そのザマはあなた、御先祖様に對しても相済みますかな？

吉 春 ……うむ、いや……そりや知つとるんぢやが——その、なんだ、むやみとグルグルと首に巻いてゐてな——。

紋 首に？ なにを——？

吉 春 エナをな、山羊の子がき、そいで——。

紋 エナあ！ へつ！ (あきれ返つて、言句に詰つてゐる)

吉 春 そいで永くかゝつて、その、やつと明け方に出よつた。

紋 そ、そ、そんなら——(と、いきり立ちそうになつて凍る自分を制するために、少しどもつて) そ、そりや、よいけど、濟んだら、ぢや、ドンドン歸つて來たらいゝぢやありませんか！ 今頃までベンベンと、あんな人達を相手に——。

吉 春 うむ、そりや——しかし南で飯ば食つて行けと云ふで——。(お雪も土間に降りて出て

來て、入口のこつちに立つて兩親の口論を見てゐる)

紋 あゝた、今、幾時ぢやと思ふちよりますか？ 飯を食べるのに半日もかゝりますか？

吉 春 うむ、いや……そいで、直ぐ歸つて來たけど――。

紋 へ？ ですからさ、するとあなた、南から此處まで戻つて來るのに、十町足らず道を、

四時間も五時間もかゝつたんですか？ 土手で晝寢でもしてゐたんですか？

吉 春 なに、晝寢なんぞせんよ。……あの、そら、山神さんじんさんの横の山さ、あすこで學校生徒が

勤勞奉仕やつちよるで、見てると、大根を蒔くと云ふに、あんなに淺く起してゐたんぢや――。

紋 ウダ／＼とあたた、なにを云ふとりますな？ 少しわかるやうに云ふたらどうです？

ホントに……大根がどうしました？ そいぢや、又あなた、その手傳ひをなさつてゐましたな？

吉 春 うむ、いや……私あ、そんな氣は無かつたのぢやが、森山先生が色々聞きなさるしな、

……それから、内の春二も生徒の中に居て、みんなに教へて行つてくれと云ふて、きかんで

――。

紋 そら、そら、そら！ あゝたといふ人はまあ、ホントになんと云ふたらえゝ人ぢやろ！

自分のうちの仕事ときたら、それこそ何一つようせんくせに、よその仕事となると忽ちヘラヘラ

して手傳ふてやる！

吉 春 だども、そのやつぱし、あれで勤勞奉仕ぢやで、そいでまあ。

紋 勤勞奉仕がどうしましたな？

吉 春 いえさ、……その、公けの、奉仕やなぞの仕事は、どんな事があつてもせんならんと、

いつも云ふるのはお前ぢやないかな？ そいで私あ――。

紋 へつ！ 私あ、そういう云ふとります。云ふ通りやつとります！ 村の者は、直ぐに人の事をコクサクおかゝなぞと云ふて冷やかすが、それはその人達が間違ふとります！

吉 春 だから、まあ、その、コクサクぢやけん、私あ——。

紋 何がコクサクです！ あゝたと云ふ人は——そりや、ふだんの日なら結構です。んど、そんな、今日といふ日がどんな日だか忘れてしまつて、ようもそんなヌケヌケと——。

吉 春 いや、忘れはせん。忘れはせんけど——。

紋 あゝたといふ人は——（いきり立つて、思はず右手を伸して亭主の襟を掴む）

雪 ……おつ母さん！

紋 （始んど涙聲になり）ホントにまあ、雪や、よう聞いととき！ お父つあんが、コクサクだと！ そいでエナだそうな！ 今頃ポカーンとして戻つて来て、エナだとよ！（掴んだ手で吉春の胸をこづく）私あ、なさけ無うて——。

吉 春 おい、おい……（弱り切つてゐる）

そこへ、縣道の方から通路に入つて来る人の影。それを認めてお紋が吉春の襟から手を離す。吉春は縣道の方へ背を向けてゐるので、人の來たのが直ぐにはわからず、急に手を離されたのでポカンとする。お雪は入つて來た人の姿を認めて、ハツと立ちすくむやうになるが、やがて、母屋の土間の方へ引込んでしまふ。——この場の様子が變なので、直ぐには入つても來れず、通路の途中で立停つて、間が悪そうにニコニコしてゐる青年。

(馬場圭太郎。二十七八のガツシリした男で、協和服をキチンと着こんでゐる。農村青年らしい単純で明るいい人柄、しかし普通の村青年の單純さや明るさとはチヨツト違つて、かなり永い間非常に激しい生活と、非常に困難な闘ひに鍛へられて出來た、鋭どいと云ふよりは鈍く大まかな平靜さが、感情の小さい起伏を始んど見せない。そのため年齢よりも老成して見える。)

圭 太 …… (帽子を脱ぎ持つて、因つた微笑を浮べ) 今日。

紋 …… (間が悪そうにマヂリマヂリとしてゐたが、やがて不意にケロリとして、あいその良い高聲を出す) あれま、馬場圭太郎さんですか! (どういふものか相手の姓まで呼んで、辭儀をする。やつと妻の手から逃れた吉春、ホツとして、わきに寄つて圭太郎と目禮を交し、何か話しかけたそうにしてゐたが、下手に口を出すと又藪蛇になりそうなので、コソコソと母家の縁側の方へ行く) こないだから、珍らしいもんとくさんにいたゞいて——どうもすみませんねえ。

圭 太 いやあ——。

紋 吉男の方から、こないだ手紙が來やしてね、圭太郎さんに逢つた時のこと、うれしかつたつて、そ云つて來やした。

圭 太 さうですか。いやあ、あの時は、まるきり偶然だつたんですからね。實は僕も向うへ行つた時から、一度國境方面へ出て吉ちゃんにも逢ひたい逢ひたいと思つてゐいたのが、忙しいんで延び延びになつてゐて——それがハルピンまで用事で出かける途中でバツタリ逢つたんでやすから、まるでもう、兩方でビツクリしやした。

紋 そうでやせうね。まあま、こつちへ! (と縁側の方へ相手を導いて行く)

圭 太 もつとも、吉ちゃんは軍の任務で上官に附いてゐるんだし、僕も汽車の時間が有つて、ホンの三十分ばかりの立ち話で、なんにも詳しいことは話せません。しかし元氣のやうでした。なんでも暫く前から本部付きに廻されて、忙しいつて——。

紋 なんか内のこと、話してゐやせんでしたかね？

圭 太 いや、別に。……そうだ、内ぢや、おつ母さんが例の通りガンガンやつてくれるだらうから、氣にかゝる事あなんにも無え——。

紋 アツハハハハ、（わが意を得たりと云はんばかりに男の様な高笑ひ）そりや、褒めたんでやすかね、くさしたんでやすかね。吉男め、ハハハ！ だども、いよいよこんな事になつて來るちうと、私でもガミガミいうてやつて行かんと、どうにもなりやせんからね。近頃ぢや、此處いらで私のことを、コクサクおかゝコクサクおかゝとひやかしますよ。たんと馬鹿にするがえゝ。今にそんな人等には罰が當りやすからね。今度又吉男にお逢ひになつたら、あれにもそう云つといて下さい。

圭 太 はあ、云つときます。

紋 ……（圭太郎の答へ方が、あまり眞面目なので又笑ひ出す）アツハハハ、ハハハ（圭太郎も釣られて笑ふ。疊の上にあつた吉春も一緒に笑ふ）ハハハハハ。それで、なんでやすか、吉男は、雪のことは、なんとか言ひよりませんでしたかね？

圭 太 ……雪子さんのこと？ ……いやあ、別に……（笑顔を引つこめて、爐の方を見る。そこにお雪は奥を向いてうつむいて坐つてゐる）

短い間——。急にカチンとその邊一帶が凝結でもしてしまつたやうな間。圭太郎とお紋と吉春の三人の眼が、お雪の後姿の上に集つてゐる。圭太郎の表情には少しばかりの童謡があるが、それもたゞ、話の中に不意に出て來た人の姿に眼をやつたと云ふだけと取れば取れない事もない程の微かなものである。お紋の眼は最初チラリとお雪の姿に行つたゞけで、あとは圭太郎の顔の表情に鋭どく注がれて、そこに現はれる何かを探り出そうとしてゐる。吉春はたゞ、氣づかはしそうに娘の方を見たり圭太郎を見たりして、氣を取られ、煙管と煙草入れを膝の上で無意識にいぢくつてゐる。

紋 ……（その緊張した空氣を吹き破る様に）雪よ！ 圭太郎さにお茶を——。

圭 太 ……いえ、もう、そんな——。

吉 春 まあ、……まあ圭ちゃん……あがつたらえゝぢやないか。……（本來この圭太郎を非常に好いてゐるのが、お紋の前でそれをどう言つて表現してよいか見當がつかないで、先程から口ばかりモグモグさせてゐたのが、やつと言葉がかけられたといつた様子）

紋 さうだ、まあ、おあがりなして。雪、お茶を入れて差上げるですよ。さあどうぞ、圭太郎さん。（緊張を解いたと思ふと、今度は急に少し度を越えて叮嚀にあいそが良くなる。その調子が、「あなたに對しては息子との關係上、このやうにすべきだからこのやうにするのであるが、だからといって、あなたの方でこれになれ親しむことは絶対に慎しんで貰はなくてはいけませんぞ」と相手に思ひ知らせるやうな——そしてたしかに、それだけの効果の有る——あいその良さである）さあ、どうぞ、まあ！

圭 太 いや、ありがたいですが、そうしても居れませんで。實は、今日立つことにしまして、それでチヨツトおいとま乞ひに——。

紋 へえ、そりや、まあ……おたごれ惜しい。そうかな。

吉 春 ふむ……（少しあわてと）そりや、しかし……もうチツトゆつくりして行きやいゝに。

……（茶を入れてゐる雪の方を見る）。

圭 太 片附けも済みやしたしね、貰つて來た休暇があと五日で切れやすし、なんしろ向うは忙しいので、いつまでボンヤリしても居れません。途中、東京に出てチヨツト用足しもありやしてね。

紋 すると、なにかね、南の山のはたの畑やなんか、そのまゝにして——？

圭 太 いや、一切合切伯父きのとこに引取つて貰ふことにしやした。どうで又今後時々戻つて來ることはあつても、僕は先づ、向うで根を生やすつもりでやすからね。ソデもまあ、いづれは呼び寄せる氣だで。あれつぱうちの畑を此處に置いといても仕方無えし——。

紋 ンだけど、あれで三段歩をチヨツト出てゐるづら？ ナゾエの工合も良し、立派な畑だが——失禮じゃが、伯父さんの方へいくらで——？

圭 太 なに、今迄、僕もソデも伯父きにや散々厄介になつてるんで、賣つたといふわけぢや無いです。チツトは恩返しにもならうかと思つて、あすこにある山とも一所で千圓だけ貰ひやしてね。

紋 あの山ともで千圓？ へえ、それはまあ、たゞ呉れてやるやうなものぢやないかな！

あいだけの畑を——それに御先祖以來、あんた方に傳つて來てゐる田地ぢやに——そうかな！

私んちでも、もう少しどうかしてゐれば、三千や四千ならいつでも欲しかったがなあ！ もつた
い無え、まあ！ そうかいなあ！ （涙ぐまんばかりにして惜しがる）

圭 太 あゝに、伯父きに引取つて貰やあ、御先祖にも申しわけが立つと思ひやしてね。ハハ、
それに向うで骨を埋めるといふ決心が附いたら、そうするのが一番えゝと思ふやうになつて

——。そ云つちやなんだけんど、向うで廣い土地を相手にしてガンガンやつてゐるちうと、そんな事どうでもよくなりやして。

吉 春 そなたに廣いところかなあ？

圭 太 廣うがすね。こつちの者がヒヨツと連れて行かれたら、頭あボンヤリして氣が遠くなつちまう。嘘ぢやありません。早い話が、この春、あしらの隊で手を附けた大豆の畑のウネの長さ
が、そうでがすねえ、あれで十二三町あるかな。とにかく種蒔きや、こやしやる時は大概トラクタ
ーか馬使ふだから、それ程でも無えけど、根つこのまはり土をコナす時なんぞ、一ウネ濟ます
のに辨當持ちで出かけて、畑の向うで晝飯を食ふだから。すべてが先づ、そ云つた風で。

曹 春 へえ！ んだが、土地の具合は——この、土質——こつちよりも肥えてると云つてたなあ？

圭 太 僕も、へえ、廣い事は知らんけど——全體、まだ鍬の入らねえ土地が多いし、この邊の
士とはまるきりタチが違ふわけです。とんかく、百姓の仕凜も頭つから違ふわけです。とんかく、
百姓のむづかしいのは、むづかしさの種類こそ違つても、どこへ行つても同じで、向うも、さて、
どうなるか、これからの苦勞次第と云ふとこでがせう。恥を云つちめえますと、僕なんぞも向う
へ渡つた初めの頃なぞ、やつぱし、景氣の良えことばかり考へてゐて、忽ち理想の百姓仕事が出

來ると思つてゐやした。それが段々にひつpegがされて來て、一年二年と經つ中に、たかなかそんなわけのもんぢや無えといふ事がわかつてきやした。苦勞はやつぱし、此方の百姓と同じ——と云ひてえが、まあ全體タチが違ふだから較べるわけにや行かねえけんど——一口に云やあ、こつちよりもキツウがす。たとへばこの邊で百姓してるぶんにや、先ずタンボに出てゐて命を取られると云ふ事は無えですからね。

吉 春 へえ、すると、あにかね、向うではやつぱしその殺されるなんと言ふことが、その……やつぱし匪賊なんと云ふ手合が——？

圭 太 いやあ、そんなにチヨクチヨク出られたらたまらん。しかし、まあ、奥地の隊では、働きに出るのに一人や二人は銃を持つて行く有様でね。ハハハ、よくよくの事でなきや、そんなもの使うことも無いけど——言つたわけで一事が萬事で、こつちで考へてゐるやうなわけのものでは無えです。そいつが段々わかつて來たんで、いよいよ僕あ本氣で腰を据える氣になりやした。今、俺達が頑張らねえと、後々、いつまで經つてもどうにもなりやせんからね。いつ又歸つて來るか、ハハハ、いや、なにその氣になれば、一週間あれば來れますから。どうでやす、小父さんも一度來て見なすつたら？

吉 春 (しんから懂れる眼つきをして) そ、そ、そりや、私等も、いつまでもこんなテイタラクで居てえとは思はねえけど、なんしろ、へえ——。(聲にふるへが出る程になつてゐる。やがてフト立つてダンスの方へ行き、その引出しを開けて何かゴソゴソと捜しはじめ)

紋 (先程から珍らしく黙りこんで、一個所に眼を据えるやうにして何かを考へ、胸算用をしながら指を折つたりしてゐたが) ……麥はえゝし、上の貯水池からあんとかして水を廻せば、

岡穂の二十俵位はとれるに！　こんな微碌しちまつては、へえ、しようが無え！

圭　大　なんでがす？

紋　（我に返つて）いえさ、あんな良い畑を惜しいと思ふてな。チエツ！　思ふめえ、思ふめえ！　雪よ、お茶はどう——（ひどく大きな聲を出す）

雪　あい。（とその聲の鼻先きへ、既にお雪が茶をのせた盆を置いてゐる）

紋　おい！（と、それが今迄自分の夢想到夢中になつてゐた彼女にとつては、出し抜けなのでピクツとしてお雪を見るが、やがて、それが自分でもおかしくなつて急に笑ひ出す）アツハハハ、あんだよ、不意に！　フフフ！（その間に雪は、茶碗の一つを圭太郎の前に置いてから、ヂツと圭太郎を見る！　なにか石になつたやうな表情をしてゐる。圭太郎もはじめチラリとお雪を見るが、やがて無表情のまゝ眼を伏せ、茶碗をとつて口をつける）

紋　ハハハ……（と意味なく笑ひながら、そのお雪と圭太郎の姿を見て不必要に明るい聲と顔で）雪も今度、いよいよかたづくことになりやしてね。

圭　太　……（飲まうとした茶碗から眼を離さないで）そりや、どうも——。

（お雪が座に堪えず、スツと立つて爐の方へ行つてしまふ）

紋　（その娘の姿を見送つてから、わざとのやうにガラガラした快活な聲で）小宮山さんからは是非と云いますでね。邦彦さんといふ人は、ちつとボツとしてゐるだなんて云ひやすけどね、なあに、此處いらぢや人が良い目をするのと直ぐにやつかんで、そういふことを言ふで。女が甘を過ぎていつまでもブラブラもして居れんし、第一それぢやコクサクに反しやすからね、ハハハ。

吉男など出征する前に、雪に就いてはいろいろ云ふてたことも有つたやうだが、こんなことになれば、圭太郎さんもひとつ、喜んでやつて下さい。

圭 大 はあ、いや、それは……。

吉 春 そいで、なにかね……（と、タンスの引出しから取り出した地圖と一枚の紙片を持つて縁側の方へ戻つて来て、圭太郎の前に地圖をひろげ、一枚の紙片の所書きと見較べる）……濱江省滿洲開拓青年義勇隊鐵驥、と言つてゐたなあ——鐵驥訓練所、第二中隊——？

圭 太 はあ、地圖を手に入れやしたね。（地圖を指しながら）これがハルビン。綏化で乗換へて、此虎でやす。でも、今度戻れば、間も無く訓練所を出て、近くの集合開拓に入ることになつてやすから、この拉林といふ所の移民村のわきだから、今迄よりもズツト汽車から近え。移つたら直ぐ知らせてよこしやす。

吉 春 ふむ、……すると、この、呼蘭川と言ふのが近えから、水の心配は無えわけか……ふむ。（紙片と地圖を見くらべてゐる……するちうと、そこへ行つて、この……農事指導員、馬場圭太郎と言やあ、直ぐわかるわけか？

圭 太 いやあ、指導員と言つたつて、自分が先頭に立つて百姓をして見せるだけでさ。それに、今度はそれと同時に、自分も開拓民の一人になつて、言はばまあ一軒の家のオヤヂになるわけ、何もかもこれからでさ。なんしろ一戸あたり平均十町歩づゝの耕作地を部落單位で共同で作ります。つまり大農法——つまり北海道あたりのやりかたでやすねえ。だから、十町歩と言つても思つたほど骨は折れねえけど、それだけに皆の氣が揃はねえとうまく行かねえので、先きに立つ者あ骨が折れやす。

吉 春 そりや、そうだろて。……それでお前、その後、肩のキヅは——？

圭 大 なあに、もうスツカリえゝです。この一二年、冬になつても痛みもしねえ。

紋 しかし、これで圭太郎さんのキヅも唯のキヅぢや無えんだから、氣を付けて貰はんなあ……向うは寒いそうだし。

圭 太 寒いにや寒いけど、馴れると平氣ぢやし、第一チャンと設備が有るだから。……なに、僕など本来ならウースン・クリークで以て死んでる筈の身體だもの。それ思やあ……。

吉 春 えれえ事だなあ。……そいで、なになにかな、その開拓村と云ふのに對して向ふの政府では、どういふ具合に——？

圭 太 はじめは家も田地も農具も當てがつてくれやす。そいつを五年先き位から年賦で返して、しまひにソツクリ自分の物になるわけで。んだから、はじめるだけなら先づ裸一貫でやれる。しかし、そいつをうまくやるかやらぬかは結局は自力でやして、五年十年経つて見なきや氣樂になると言ふわけには行かれえようがすね。

吉 春 うむ、そりや大きにさうかも知れんな。何事に限らず……んだが、あんしろえれえもんだなあ——。

紋 そらそら、お父つあんの、えれえもんだが始まつた。

吉 春 だどもさ、とんかく、えれえもんどやないかな。

紋 いえさ、そりやさうかも知れねえけど、こないだから圭太郎さが見えさえすれば、その度に同じやうな事ばかり何度聞きや、あんた氣がすみますな？ 圭太郎さだつてウンザリなさるわな。そんなに滿洲の事が知りたきや、いつそ、あんたも、ついて行きやしたらえゝ。

吉春 そ、そんなお前、そりや、私だつて行けるもんなら——。

紋 アツハハハ、とんかく、圭太郎さん、又その内向うで富男に會ふやうな事でもあつたら、どうかひとつ、此方の様子をよく言つてやつて下さつて、お雪のことなぞも、手紙で言つてやるにや云つてやつたけど、——どうか安心して、お國のためにシツカリ働いておくれと言つて下せえよ。

圭太 えゝ、そりや、もう……そいぢや、僕あ、これで——どうか皆さん、お元氣で。

紋 そうかなあ、まあ、もちつとユツクリして行つてよろしうがんしよに。

圭太 いえ、もう……四時の上りでやすから。それに、ほかにもチヨツト寄るところが有るんで……（微笑して）小父さんのお獅子も、とうとう見せて貰へなかつた。実はそいつを僕あ樂しみにしてただけど。

吉春 もう、へえ、しかし……そんな時でもあるめえ。

圭大 んでも、僕など子供の時から見てるで、なつかしいもんなあ。第一、一色の家のお獅子と言やあ、昔つからこの邊の里神樂では一番の名物なのに、惜しいや。

吉春 ハハ（とお紋の方を氣にして）あれも酒でもくらつてゐた時分の事さ。

圭太 へえ、——？

紋 おとゞしの十二月八日以来、フツツリと酒を斷ちたさつてな。ハハ、そいでも、まあ、わしら感心してゐやすよ。

圭太 そうでやすか。そりや……しかし、あんなに好きなんだから、たまには少し位——。

紋 あゝに、そんな、酒など飲んでウカウカしてる時では無えですからね。兵隊さんに對して

も申しわけがありません。……こないだ、あんたからお土産に貰ったお酒も、まだ手をつけんとあゝして——（ダンスの上に置いてある陶器の酒壺の方を見る）

吉春 （これもその方を見て）虎骨酒といふと、ホントに虎の骨が入つてゐるかな？

圭太 さあ、そう言ひやすけどね——。

吉春 まあ、なんだ、せつかくの物だで、お雪のおめでたの式の時にでも、いたゞかうと思つてな。ハハ。

圭太 （吉春の言葉は耳に入らなかつたふりで、なに氣なく縁側から腰を上げて）ぢや、これで——。

紋 そうかね、そりやま、あんたもよく身體に氣をつけなして——。

吉春 ぢや、俺あ停車場まで見送りに——（腰を浮かす）

紋 そりや、なんだけど——でも、間も無く、小宮山さんから見えるから、あゝた——。

吉春 んでも、ほんのチョツクラ——。

圭太 いえ、もう……どうせ、ほかへ寄る所もある等どうか、もう。では、これで（ビシツと頭を下げる）雪子さんも、どうか——（爐の傍に頭を垂れて坐つてゐるお雪も頭を下げてからスタスタと通路の方へ出て行く。吉春は縁側から庭におりて、通路の方まで見送りに行く。圭太郎

は通路の奥で、吉春に向つて、もう一つ辭儀をして縣道を下手奥へ消える。見送つてゐる吉春）

紋 あゝた！ あゝた！（と、放つて置けば又人の後について遊びに行つてしまふ子供でも呼びつけるやうな聲を出して、通路の方へ來かける）あゝた！

吉春 （浮かない顔をして戻つて來る）……おい。

紋 おいぢやありませんよ。もうソロソロ同うの人が来る時分ぢやから、チャンと着物でも着かへてゐて下さらんと！ さあさ。（と吉春の尻を押すやうにして六疊の方にあがり、ガチャガチャとダンスの引出しを開けて吉春の晴着を取り出す）あい！

吉春 ……わしは、これでよからう。

紋 よくありませんよ！ そら！（と吉春のきたないハンテンを引つpegがすやうにぬがせて、ゴリゴリした晴着を着せかけてやる）はい、帯。（言ひながら自分も野良着を脱いで、紋の附いた着物を着る。この方は手早い。帯を締めながらまだ爐の傍を離れぬお雪の方へ）そいで、雪、三寶や銚子盃ちょうしなど、チャンと洗つて置いたぐらうね？

雪 ……うん。

紋 お酒は、配給のを三軒分ゆづつて貰つてあるから、それでよしと。（自分一人でうなづいて）でと、肴には凍豆腐の煮付けと、（更にお雪に）ニンジンのゴマアへは出来たなあ？

（帯の上を手でトントンと叩きながら）

雪 ……出来てる。

紋 あにを、そんな浮かない聲を出すな？ もつとハキハキせんと！ チヤンと、お白粉でも付けて…去年買ったのが、まだ有つたらうが？ え、お雪？

雪 うん…でも——。

紋 なあに、恥かしい事なんぞ有りはせん、一世一代の日ぢやもの、思ひきり綺麗にして、向ふの家をビツクラさせてやるがえゝよ。ハハハハ！（氣の立つた高笑ひで、袖や襟の具合などをなをしてゐる）

吉春 ……なあ——（これは何か考へ考へ、まだ白ちりめんの帯を締めながら） ……だども、へえ……なんとかならんかな？

紋 なんとか？ ……なにがですな？

吉春 む、いや……そのう——。

紋 酒ですか？ そるや今日は特別ぢやから、あゝたにも飲んでいたゞくとして、だから、内のぶんのほかに二升餘り借りてあるから——。

吉春 いや、その……雪のことさ。

紋 雪がどうしやした？

吉春 いやさ、その……小宮山の方のこと……わしはどうもその——。

紋 また、何をウダウダ言ふてゐます？ ハツキリ言ふて下さいよ！ 小宮山がどうしましたな？ どうかならんかとは、何がですな？

吉春 いやさ、俺あ、たゞ、その……チヨツトそんな氣がしたで——。

紋 （チレテ）だからさ、だから何が、全體何がそんな氣がしたんですかな？ 早くハツキリ云つて下さい、この忙しいのに、ホントにキモの煮える！

吉春 いや、本人さへそれでよければ、それでいゝやうなもんぢやけど——（まだ言つてゐる）紋 だから、一體全體何がどうなんですすよ？ すると——すると、なんですすか、お雪が小宮山へ行くと決めたのを、今になつて、どうにかならんかとおつしやるんですすか？

吉春 だから、本人さへ、それでよければ——。

紋 （とうとう怒鳴りはじめる）そいぢや、そいぢや、本人が望まないのに私が無理押しつ

けに行かせる事にしたとでも言ふんですか？ そんな事を、今更になつてあゝた言ふんですか？
そいぢや、そいぢや、雪は私の實の子ぢやないんですか？ 自分の腹をいたためて此處までチヤン
と育てゝ來た自分の子を、この私が無理押しつけに片附けようとしてゐるわけですか？ ホント
に馬鹿も休み休み云つて下さい！ そりや、話は私が運んで來ましたよ！ 私がしなければ、あ
ゝたはその調子で何處へ行つても口一つきけやしないぢやありませんか。私が運ばないで誰がし
てくれますな？ それと云ふのも、私やお雪の行末が仕合せになるやうに、それにや家がらばか
り良くつても内みてえに貧乏な家でなく、チツトは樂の出來る家へと思つて———そうですとも、
貧乏世帯を背負つて、あゝたみたいな甲悲性の無い人を相手にやりくりばかりして働き通して來
た苦勞は、私だけでたくさんです。お雪にや、そんな苦勞はさせたく無い！ (いつか涙聲にな
つてゐる) そう思ふて、そう思やこそ、小宮山の家では嫁になり手の口はいくらでも有るのを、
サンザ苦勞をして、ようやつとの事で、私は話を此處まで運んで來たと言ふのに———あゝたの言
ふことを聞いてりや、まるで私が、ウヌが見榮やえようのために娘の仕合せなんど考へもしねえ
で、いゝくらかげんの所に無理に片附けようとしてゐるやうに———そんな、そんな事を今更
云はれて———。

吉 春 いや、なにも、その———(相手のけんまくにちぢみ上つてしまつて、それ以上は言へな
くなつてゐる。それより前、お雪は爐ばたをツと立つて、八疊から奥の納戸部屋に姿を消してゐ
る)

紋 よござんす！ そんなに私のすることが氣に入らんきや、なあに、話はこれぎりにして、
少しばかり恥を掻きや濟む、私あ引つ込んでゐやすから、あゝた小宮山へ行つて、都合で取りや

めにしますからと言ふて来て下さい！ 私あそんなの、ごめんです！ ごめんです！ 全體この話と言ふものは、雪もあゝたも初めから反對なんどチツトもしねえから、そいで私もその氣にたつて取りかゝつた話で——。

尚も言ひつものらうとしてゐる所へ、奥の縣道の方から女の聲。

聲　お紋さん！ お紋さんのおかみさん！ （その聲でお紋はピタリと言葉を切る。しかしまだ吉春の顔を睨んでゐる）居ないかね、お紋さんのおかみさん？ （云ひながら、通り抜けの土間の突當り——表口——に、白く光る縣道を背にてシルエツトで立つ近所の女房のお才。氣のよさそうな百姓女で、白い割烹着に、文字を書いた白襷をかけてゐる）

紋　……（聲の主が誰であるかゞわかり、それに對して、今迄の言葉とは似ても似つかぬ愛嬌の良い聲を出す、眼は相變わらず三角にして吉春を睨みつけたまゝ）へい、お才さんのおかみさんかね、居りますよ！ （云ひながら、もう一度凄い眼で亭主を睨み据えて置いてから、板の間の部屋の方へ）……こりやまあお才さん、こないだはまあ小米の粉をたくさんに貸して下さつて、どうも——（お才の身なりを一眼見て）へえ、今日は婦人會で、あにか——？

お　才　それがさ、分會で、こつちの班に今朝云ふのをツイおつことしてゐたと言ふから、阿呆な話ぢやないかね。もつとも書記の市松かねさんも忙しいんだから無理も無えけど、それでホンの先程あわてて馳けつけて来て、そう云つてね、班長さんにはあんたからそう云つてくれと云ふで、急いでやつて來やした。私あ、へえ、副班長なんぢやから、先づ班長さんの一色お紋さん

に云つてくれねば困ると云つたども、なんとしても急ぐからちうてな——。

紋　へえ、へえ——（と、相手のいかにも百姓女らしいクドクドとした言葉を打切るやうに）
そいで、どんな用事かな？

お　才　あんでも、傷痍軍人さんの一杯乗った汽車が通過するで、驛の方で皆で接待をするちうです。お茶やお菓子はもうチャンと用意が出来とるそうで——んでも、なんしろ、こんな急では、此方の班では大概畑に出とるから、呼び集めるといふわけにもいかんし——。

紋　そいで、何時の汽車な？

お　才　三時二十分の下りぢやそうなが——。

紋　そら、いかん！　三時の下りならもう直きぢや。えゝと——んだが、困つたなあ、實あな、お才さん、今日はもう間も無く、小宮山さんの衆がお雪を見にやつて來ると云ふ事になつてゐてな——。

お　才　へえ、そいぢや、いよいよ結納と云ふ事に——？　そりやおめでとうがんです。

紋　いや、なにも結納と云ふわけぢや無いけんどな、どうせうちらぢや、そんな格式張つたことをする柄ぢや無えといくら辭退しても、先方ではどうしても、とんかく嫁見といふことになつると言ふてね——はあて、困つた。

お　才　そりや居てやらんといけません。なに、ようござんす、今日一度位、それに三分か五分の停車の間に湯茶を差し上げる仕事ぢやもの、あんた一人居なくても差しつかえ無えから。

——それでやすか、お雪ちゃんもいよいよそう云ふことになれば、お宅でも安心ぢやな。……そいぢやま、私あ急ぐから、チヨツクラ——分會の方へは私がそう云つときやすから——やれ忙し

いぞ！（笑ひながら縣道を下手の方へ立去りかける）

紋 （あわてと） いや、お才さん、お才さん、私も行きやす！ チョツクラ待つて下すつて！
お才さんのおかみさん！

お才 そうでやすか……でも今日一日位、そんな無理せん——（足をとめる）

紋 いや、お雪の事は家の中の事でやす。傷痕軍人さんの接待とあつちや、大事な御奉公ぢやから——なに、小宮山さんの衆は、内の人が戻つて來てゐるで、大丈夫ぢやから——（云ひながら大急ぎに六疊にとつて返し、再びタンスの引出しから白の割烹着と白襷を取出し、割烹着に手を通しながら、ヒヨイと見ると、帯を締め終つてポカンと棒立ちになつておるのは、當の大丈夫な内の人の姿。それをヂロリと見て、低く押へた聲で口早やに）あゝた、そいで——袴は？

吉春 袴あ？

紋 チエツ！ また忘れましたな？ 南から借りて來るやうに私があれば云ふたに——。

吉春 ……どうも、その……。

紋 袴が無くてしょうがありませんかな！ 仕方が無い、そこのおキンさんの家で嘉六さの袴を借りて來なさい！

吉春 でも、俺あ、袴など穿かねえでもよからうで——。

お才 お紋さん、行くなら急がんと遅れやすがな——。

紋 へいへい——（と表へ返事をしながら、着終つた割烹着に白襷をかけやうとしてゐたが、ぢれ切つて、眼をギラギラ光らせるや、何も云はず、タンスの横に立てかけてあつたソバ打の棒をムズと攪んで吉春の方へ）

吉春 フ！（聲の無い叫び聲を上げ、あわを喰つて横つ飛びに縁側へ。ころげるやうにそこに脱いであつた草履を足に突かけるや、庭を走り、井戸の手前を通り、通路を走つて奥縣道を上手に消へる。逃げ足は早い）

紋 ……（それを見送つてから、棒をタンスの横に置き、サツサと坂の間の方へ出て行つて、その邊を見まわして）お雪！ お雪！

雪の聲 あい……（納戸部屋の方から）

紋 ぢや、私あ一つ走り行つて来るからな——（奥の壁ぎわに置いてある鏡臺を、いきなりひつかゝえて爐の傍に持つて来て）チヤンと綺麗にしてゐるだ！ 此處に鏡臺出しといたから！ いゝね！ おつ母さんの云ふ通りにしないと、ホント、もう知らんぞ！——お雪！

お雪 ……（何か返事をするが、よく聞こえない）

紋 すぐに戻つて来るで、いゝね！（と言ふ間も土間に降りて下駄を穿き、カタカタと縣道の方へ出て行きながら、愛想の良い聲で）お才さん、お待ちどう……（云ひながら、お才と二人の姿は小走りに奥下手へ消える。以上、お才が現はれてからのお紋は殆んど眼にもとまらぬ四角八面の活躍ぶり。アツと思ふ間に家の内外に人の姿はまるで無くなつてゐる）

——間。

お雪は納戸部屋で何をしてゐるか、コトリとも音を立てない。少し離れたどこかの家で鶏が、コケツコツコ、ケケケと鳴く聲が、却つて比の場の静寂を深める。

そこへ、少し足音を忍ぶやうに前後を見まわしながら、縣道上手から通路の方に入つて来るソデ（二十二三歳）。質素な外出着に、小さいフロシキ包みを持つてゐる。もともと氣の勝つた快活な女だが、今は少し緊張して無口になつてゐる。

ソデ ……（通路と裏口の角の所から家の中を覗くやうにしながら、低く押へた聲で）今日は……今日は……（屋内に人影が無いので、庭や納屋の方を見まわしてゐたが、やがて縁側に近づく）今日は……。雪ちゃん……。返事なし。暫くの間、聞きすましてゐてから、今度は前よりも少し大きな聲で）雪ちゃん！（返事が無い。ソデ立て考へてゐる。……やがて、諦らめて立去ろうとして歩み出すが、念のためもう一度）雪ちゃん、居ないの？

雪 ……（納戸の板戸をスツと掲げて八疊に出て来る。そして八疊の眞中に立つたまゝソデを見つめてゐる）

ソデ あゝ……（これも臣に立停つたまゝ、お雪の顔を見守る）……どうしたの？

雪 ……（尚ソデを見詰めてゐたが、フト疊の上に坐り）ソデちゃん……私、駄目だわ。……（両手で顔を蔽ふて、疊の上に突伏してしまふ）

ソデ ……一切を諒解したやうな、しかしガツカリしたらしい、でも、相手をとがめるといふのでは無く、むしろお雪に同情していたわるやうな顔付きになり、しかしにわかにかに云ふべき言葉も見つかからぬ様子で、相手の頭髮と背中を見守つて立つてゐる）

間。

雪 ……（顔を半ばあげて）荷物も拵へたんだけど！ どうしても思ひ切りが付かないの。

ソデ ……。

雪 ……おつ母さんやお父つあんの顔を見てみると——。

ソデ ……（黙つて、うなづいて見せる）

雪 ……圭太郎さんにはソデちゃんから、よろしく云つて——。

ソデ ……（相手を慰めるやうに）いゝのよ、いゝのよ。こないだから、兄さんも大概あきらめてみたんだから……それに此方の話が此處まで進んで来ておるのに、もともと無理だったんだから——。

雪 ……あんだけ前から約束しといて——それに兄あにからも手紙でそうしろつて何度も云つて来ておるのに——おつ母さんが、自分一人でドンドン話を進めるのを見てゐながら、私にはどうにも出来ない。……

ソデ ……いえ、小母さんにしたつて、雪ちゃんが仕合せになるやうにと思つて、そいで一所懸命なにしてゐるんだから——。

雪 ……いえ、みんな私がイクジなしだから。……駄目なんだわ。……兄さんが歸つて來たら、キツト怒られ。でも仕方が無いわ。……へえ、もうどうでもいゝの。おつ母さんの云ふ通りにそれが私の運命でしょ。

ソデ …… (返す言葉も無く、ポロポロ涙をこぼしてゐる)

雪 …… かんにんしてな、ソデちゃん。

ソデ …… (思はずウツと洩れて来る泣聲を自分で噛み殺すやうにして、何度も何度もコツクリをして見せて) …… そいぢや…… 急ぐから、私、これで—— (泣聲になりそうなので齒の間から切れ切れに云つて、通路の方へ行きかける) …… んでもお別れに、兄さん、汽車の窓から見れるように、雪ちやん、此處に出てゐてやつて—— 四時の上りぢやけん。

雪 …… (何度もコツクリをする。しているうちに耐え切れずなつて袖を蔽う) かんにんして！ 圭太郎さんにさう云つて—— かんにんして頂戴！ …… (疊に突伏してしまふ)

ソデ、なきながら通路をスタスタと縣道の方へ出て行き、奥下手へ小走りに去る。

…… チョツト間が有つて、奥の縣道の上手から吉春がタトウ紙に包んだ袴をかゝえて出て来る。そこへ来るまでに既に、自分の家から走り出して行くソデの姿に眼をつけてゐたと見え、通路への曲り角に立停つて、向ふへ走り行くソデの後姿を見送つてゐる。

…… やがて自分に返り、通路を通つて縁側の方へ来る。

吉春 ふう…… (ヤレヤレと云ふやうな吐息をついてから、手にかゝえた袴の包みを見、それからその邊を見まわす。上にあがる。あがつてヒヨイと見ると、八疊に突伏してゐるお雪の姿) …… (立つたまゝそれをヂツと見てゐる) …… どうした？

雪 …… (動かない)

吉春 ……どうしたよ？……え、雪？

雪 ……。

吉春 （娘の姿から何かフツと来るものがあり、追求しようとする調子は全くなくなつて、シミジミとした眼色で、袴の包みをそこに置く。そして、とりとめの無い調子で）ソデちゃんが、来たやうぢやが——（云ひかけるが、それきりで口をつぐむ。それが、云ひたい事が口から出さうになつたのを、押へて黙つてゐるのとは違つて、氣持にはあつても、それを口に出して云ふ事の方は胴忘れをしてしまつたといふ風の例の通りで、ボンヤリして突立つておるのである）
……。

雪 ……（父が言葉を切つてからあまり永く黙つてゐるので、フト上體を起す。涙は既に乾いてしまつて、思つたよりは明るい顔をしてゐる。まぶしそうにして父を見あげる）……。

吉春 ……どうしたよ？

雪 うゝん。……（父の足もとのタトウ紙に眼をやる）

吉春 （その視線を追つて）……西のおキンさんから借りて来た。……嘉六さんのぢや、タケが違ふだらうと云ふてゐたがな……あにも、人から借りてまで穿くことも無えと思ふけど

……へえ、仕方が無え。フ……（娘を見てニヤリとする。お雪も釣られて微笑。お互ひに憐れむやうな寂しい微笑）

雪 んでも……（タトウ紙の所へ来て、包をとぎ、袴を出す。古い仙臺平である）……以前は、うちにもいくつも有つたわね。……お父つあんが袴を穿いて、お獅子を舞つたのを、私おぼえてる。（云ひながら、袴のひもをほどいてゐる）

吉春 へへ……。なに、俺がやるからええ。……それよりもお前、チャンとしとかんと、又、叱られるぞ。

雪 いゝの。

吉春 んでも（袴のひもを雪の手から取って）……白粉でもチャンとして……怒られても、知らんぞ。

雪 ……（しかた無く、立って、母親が爐の傍に出しといてくれた鏡臺の方へ行つて坐る。しかし、鏡の中の自分の顔を見てゐるだけで、はかばかしく化粧もしない）

吉春 えーと……（此方では袴を穿きにかゝつてゐる。この袴が恐ろしく長過ぎる。スソを丁度に穿くと、上の端を乳の下あたりに締めなければならぬ。困つて、それを眺めてゐる）

雪 ……（鏡の車を見たまゝ）お父つあん。

吉春 あんだ？

雪 ……（何か云ひそうにするが、どう云つていゝかわらぬらしく、やめてしまふ）

吉春 （黙つて袴のひもを巻き直してゐたがフト手をとめて、お雪の顔を見てゐる。やがて）
雪……お前、圭太郎君と……何か話が有つたのとは違うか？

雪 ……（後ろ向きに鏡の中を見たまゝ、暫くヂツとしてゐてから）……どうして？

吉春 ……うゝん、何もなきや、それでえゝが――。

雪 んでも……どうしてな？ ……

吉春 なにさ……そんならいゝ、別に！（鏡の中に小さく寫つてゐる娘の顔を見ながら）えゝな、雪？ お前、小宮山でえゝな？ それを、お前が今間違へるちうと、後で泣くことになる。

……そうなるに俺にしても、せいから、つまりがおつ母さんにしてもだ、つまりが、つらい思ひをする——。

雪 ……（父の言某のうち次第にうつむいて来て、前髪が鏡につく。白粉の壺を握つた左手がワナワナとふるえてゐる）

吉 春 ……俺に似て、お前も氣が弱い。……此の際、どうしろこうしろと俺にや云へんが……たゞな、どうでもえゝから、これは自分の一生の事ぢやから、自分が……仕合せになるかならんかの境ひ目ぢやから、よく考へて、こうと思つたら、思ひ切つて——（ふるえてゐる娘の左手に、眼が行つてゐる）……人間、一生のいち大事の時は……思ひ切つて——崖から飛び降りる氣で……自分のホントにしたいやうに、せにやいかんぞ。……俺がこんな事云ふと變ぢやが……自分のホントにしたいやうにせんと、一生の一大事の時だけは——。

雪 ……お父つあん、私あ——私あ……。

吉 春 ……（その娘の思ひ入つたやうな聲に、お雪の方へ歩み出す。そのトタンに、長過ぎる袴の前スソを自分で二つ三つ踏みつけてヨロヨロと前につんのめつたあげく、板の間の部屋の方へ転ぶ）へ！

雪 ……（その音でびつくりして、振返つてサツと立ちあがる。庫の上でモガモガしてゐる父の姿）まあ、お父つあん、どうして——？

吉 春 へ！ おゝ痛え！ へツへへへ、あゝに、袴あ踏んづけた、へへへ！（顔をしかめて痛さをてらえながら、這ひ起きる）ハハ、へへへ！

雪 まあ……（見てゐる間におかしくなつて、これも笑ひ出してゐる）

吉春 見ろ、まあ！ ……な雪、 ……でねえと、ほら、これ見ろ、こんなになる。 ……自分の一生の大事な時にだけは、テキパキしねえと、俺みてえに、これだ！ 見ろ、まあ！ こう、俺みてえになつちや、おしめえよ。 な！ 俺だつて、これで、いっそ満洲あたりに出かけて、もう一働きと思ふことだつてあら。 だども、へえ、あんしろ、このテイタラクぢや ……んだからよ——。

雪 ……（笑ひが引込んで、泣けて来る。耐えきれず、両手で顔を蔽ふ。轉んで打つた肱の痛さをさすりさすり、その娘の姿を見てゐる吉春。——間）

しばらくして、下手から近づいて来る列車の音と汽笛。

吉春 ……（その列車の汽笛と近づく音に耳をやつてゐたが）へえ、三時の下りが通る。

……兵隊さんが乗つてゐるといふたな ……（娘に向つて尚云ふべきことがありそうでゐて、口に出て来ないまゝに、近づいて来る列車の音に氣をとられ、歩くともなく縁側の方へ出て来る。お雪は疊に突伏したまゝ） ……ふむ ……（袴のつまを取りながら下に降り、草履を突かけて庭を横切り、柵の方へ来て、柵の上から上手の方を覗く。間近かに近づく列車の響。「雪、来て見い、兵隊さんが一杯だ」と娘の方を振り返つて云ふが、その時には既に列車の音が正面を通過しつゝあるの、その聲は列車の響きに消されて聞こえない。吉春、その音——即ち正面に向つて、両手を高く擧げて「萬歳！」と叫ぶ。その叫び聲も轟々たる列車の響きに消されて、此方までは聞えぬが、お雪には聞えた見え、突伏してゐた上半身を起し、坐つたまゝで通り過ぎる列車の窓

を見る。下手の方へ通り過ぎて行く列車の音。吉春は柵づたひに下手一番前まで来て、列車を見送つてゐたが、やがてフト我に返つて、兩手を膝のところまで下げ、深いお辭儀を一つ、二つ、三つまでする。遠ざかり、やがて消え去る列車の音。……お雪の方は頭を下げる事も忘れて、眼を据えて、列車の去つた方を見ながら石になつたやうに動かぬ) ……ふむ……何せ大したもん

……有難いことぢや……(もう一つお辭儀をしてから母家へ戻りかけるが、うつかりして袴のつまをとるのを忘れてゐて、再び前袴を二つ三つ踏みつけヨタヨタするが、今度は轉ぶに至らず、袴に腹を立てた顔で、庭を横切つて縁側へ。歩みながら娘と顔を見合せて微笑みかけるが、その娘はあらぬ方を見つめた兩眼が少しすがる位にして動かぬ。何かを考へてゐるといふよりは、自分の心の中を見つめてゐる姿。その様子に吉春は、少しギョツとした様に改めて娘を見る) ……お雪……(その聲が聞こえぬかお雪は動かぬ。しばらくの間吉春は娘の顔を見守つてゐるうちに、次第に落つかなくなり、娘の視線の向いた方を見返つたり、又娘の身體の周圍をウロウロと見廻す。……間) ……お雪、どうしたぢよ、お前——?)

雪 ……(父親の聲がやつと耳に入つて、フトそちらを見る。そして、不意にビツクリした様な顔で四邊をキョトキョトと見廻した末に、再び父親の顔を見守つていたが、何か怒つた様な表情でツト立つて歩いて行く)

吉 春 ……どうしたぢよ、全體? ……(上にあがる) お雪よ……(しやう事なしに座敷の眞中に坐り込む。……そこへお雪が、用意して爐邊に置いてあつた酒盃を乗せた古い三寶と、銚子ちやうしを持つて出て来て父の前に据える)

吉 春 ……(ビツクリして、三寶と銚子と娘の顔を代る代る見比べる) ……ど、どうして

……これ、どうすんだ？

雪 （初めて静かにニツコリして）お父つあんに、一杯あげる。

吉 春 んだから、この酒を、おらが何も――。

雪 ……いゝから、おらがあげるから……（三寶の上の酒盃に銚子から酒を注ぐ）

吉 春 だどもよ、これは、へえ、小宮山の衆や、南の伯父さや、町のお源が來たらあげるもんぢやねえか。

雪 だどもさ、どうでお父つあんも一緒にあがるんぢやから。その前に、ホンのいち二杯……おらが酌をしますで。

吉 春 うむ……そりやありがたいが……（ズルそうに微笑して）しかし、又お母さんに叱られるぞ。

雪 なに、酔ふほどはあげねえから。

吉 春 だども……變だな、なんだか……（言ひながらも、もともと咽喉から出そうな酒で、いつの間にか酒盃を取り、鼻の下に持つて來て香をかぐ）何しろ、へえ……（舐める様にして飲む）フン、ホウ、どうも、……味がどうも妙ぢや。

雪 二年近くもやめてゐたゞもの。（もう一杯注ぐ）

吉 春 （ニタニタと笑みくづれて）んでも、わりにえゝ酒ぢや。（更に咽喉を鳴らして飲む）その酒盃を娘の前へ出して）ぢやあ、ま、なんだ、お前も一つ――。

雪 いやあ、おらあ――。

吉 春 えゝから飲め、一杯飲んで氣をしつかりせんと。お前の様に、へえ、氣が弱くてはども

ならん。

雪 ……（酒を受けて）それでは一つだけ。（吉春酒を注ぐ）

吉 春 グツと一息に飲むだ。（ためらつてゐる娘を勵す様に手まねをして見せる。お雪一息に飲干す）ホウえらい、ホウ！（お雪が酒にむせて三つ四つ咳入る）

雪 ……ホホホーホ、ハハ。（父娘二人が聲を合せて笑ふ。笑ひ終つて目に溢れて來た涙を指の先で拭いてゐる）にがいわ。

吉 春 ハハ……だども、なんだぞ、おつ母さんが、あゝして一人で騒いでゐるのも……俺が甲斐性が無えからしようねえ……やつぱし、なんだ、お前の爲に良かれと思ふてすることぢやから、悪く思つたら、あかんぞ。それ忘れたらいかん。あれでおつ母さんにしてみりや、一所懸命ぢやで……。

雪 ……。

吉 春 まづ、あんな性分だ。あゝしないとこの一色の家が再興出來ないと思つてゐるからだ。

しかし、いまのこゝいらは、全般どんな事をして昔には戻らん。百姓も商人も昔はチャクイことをしたり、又自分の骨折り次第ではどんなにでも身代を太らすことが出來た。それだけ拔け道があつたんぢやが——そりや近頃でも抜け道をくゞつて、うまくやらうと思へばやれんことは無え。だどもそんなことをしても殆まらんし、第一そんなことをしてはいかんのぢや。早い話が、自分の家の田地を殖やしてみても、たゞ田地の持主が代るだけで、この村で出來る米麥やなりものが殖えるわけぢや無えもんなあ。田地は誰の持物であらうと、要するに作物が澤山出來ればそれでいゝのよ。そういふ時代ぢや。……こねえな事を云ふとおつ母さんから又怒られるが、みんな

なが自分の家だけのことを大切に思ふて財産を殖やしたり、家の格式を大切にしたり、出世をしようとして一人一人眼の色をかへてガツガツし始めたら、世の中は全體どうなる？

雪 ……（二杯の酒で雄辯になつて來た父親の顔を微笑しつゝ見てゐる）

吉 春 な、そうだらうが？ おらはそう思ふ。それは、云つてみれば一色の家も大切、お前達孫子の行末も考へてやらんらんけど、お母さんみてえに血眼になつて、田地や財産を掻き集めて子供に遺してやつても、財産などと云ふものは、運次第で無くなるとなれば明日にも無くなるものぢや。そんなものよりも大切なことは子供にしつかりした量見を遺してやること。そいで子供がちやんと人らしく、小さいながらお國の役に立つて、しあわ幸せにやつてゆければ、親としてこれ程嬉しいことはねえわけだで…：…なあそうだろ、雪、そうぢやないか？

雪 ……（父の言葉に頷いてゐたが）もう少し飲むな、お父つあん？

吉 春 ……いや、そうさな、しかし…：…へへへへ。

雪 お父つあん、わし…：…お父つあんのお獅子が見たい。

吉 春 なに？ お獅子と？ ……ふむ、お獅子か。そうよ、そうだなな…：…お獅子も久しいわ

い。やるか——（つと立上り、勢ひよく納戸部屋への襖をガラリと開けて入つてゆき、そこ一寸ゴソゴソしてゐたが、その長持の上にも飾つてあつたらしい、見事な金糸銀糸の縫い取りのあるホロのついた大型の獅子頭の見事に嚴めしい古いヤツと、これも古い獅子舞の平太鼓をバチとを両手にかゝへて威勢よく出て來る）ドツコイシヨ。（それらを疊の上に置いてドツカリと坐る）ふむ、いつ見ても吉兵衛獅子はキビの良い奴ぢや。…：…（その獅子頭に積つたホコリをフツフツと吹き拂つたり、惜しげもなく晴着の袖で拭いたりしながら）これはお前、越後の西蒲原

に昔から傳つた獅子囃子の名人で吉兵衛さん——おらも若い時にはわぎ／＼一色の家まで出向いて貰つて、金にあかして習つたものよ。あの頃もう六十近かつたから吉兵衛さんも、もうへえ死んだか。この御時勢ではあゝいふ家柄も、もう無くなつたかの。……んだが、なんでまた今頃お前お獅子が見たいなどと——。

雪　でもさ、……いつか、お父つあん、わしがかたづく時には一世一代うんと踊つて見せるつて云つてゐた。

雷　春　あ、そうか。そうか。（娘の顔を改めて見直して）ハハハハ、そうか、そんぢや、一つ——（イキナリ獅子頭をスポリと冠つて一つ、二つ頭を振り下顎を動かし試みる）ハハハハ。

（お雪はしかしシンと坐り、嚴肅なものを見る様な顔をしてそれを見つめてゐる。その様子を獅子頭の齒の間から見てゐるうちに、吉春は次第に笑ひを引込め、しばらくジツとしてゐたが、やがて、獅子頭を脱いで沈んだ聲）だども……なんやら、つまらんわい。

雪　そんなこと云はねえで舞つて見せてよ。

吉　春　……つまらん。

雪　だどもさ、おら、へえ、お父つあんのお獅子、これが一生の見納めになるかも知れんから。これでかたづいていけば……。だからさ。

吉　春　そうか。そう云へばそうかも知れん。んぢやま——（再び獅子頭を取上げて冠りかける）

（そこへ郡六（お紋の従弟。四十歳過ぎ。農具の仲買をやつてゐるが黒の背廣姿で、大きな風呂敷包を掲げ、表口からスタスタと土間へ入つて来る。いつもニヤニヤ笑つて彫輕なことばかり云つてゐるが、内實は少しコス辛い位に利巧な男である）

郡 六 よう、兄さん、久しぶりでお獅子が出たなあ。デテテドンドン、テンテン……アツハハハハ、アハハ（云つて入つて来るや、いきなり大聲で笑ひながらゴムの探靴をスポンスポンと脱ぎすてゝ上にあがる）ハハハ、テレツクテレツク、ドンドン！

雪 アレ、郡六の小父さ……。

郡 六 よう雪ちゃん、綺麗になつたな。ハハハ、全く自分が年をとるのはわからねえけど、娘ツ子の大きくなるのは瞬く間だのう。どうだや？ ハハ、ハハ、小宮山の邦彦さんは、雪ちゃんをお嫁にするのが嬉しくて、もうへえ、ワクワクしてな、うちにヂツとしてをれんで、山ん中や畑をウロツキ廻つてばかりゐるそうぞ。昨日も北山の谷で出くわしたら、ニタニタニタニタ笑つてばかりゐてな。へへ、無理もねえ。この村第一の小娘を貰へるんぢやけんなあ。（ひやかされてお雪は眞赤な顔になり、コソコソと爐の方へ茶の仕度に立つて行く。その後姿を舐め廻すやうに見てゐたが、今度は吉春に）なあ、兄さん、雪ちゃんは幸せ者よ。あんだだけの財産家の若嫁さんにいきなり坐られるんぢやけん。やつぱし娘を持つたら何はともあれ綺麗な娘を持たなあかん。

吉 春 ん、へへへ、いや……（無意識に獅子頭をしきりとなでる）

郡 六 ハハ、今日は一つ久しぶりに兄さのお獅子を出して貰ひやすかな。一色のお獅子云やあ、金がかゝつとるからなあ。旦那藝といつても、昔からこの縣一體に鳴り響いとんぢや。（言ひながらバチを取つて、太鼓をトトトン、トトトンと鳴らしてみる）ハハハハ。

吉 春 ……でも、もうへえ、あかん。（相手の調子に乗つて行かうとはせず、獅子頭を脇に置く）

郡 六 何故な？ どうしてだえ？ 近頃ぢや、お祭りもあの調子。こんな時に出さねえと、折角の吉兵衛獅子が泣ぐぞ。丁度袴もはいてるし、本式ぢや。よう。吉春兄さ。

(でも吉春は何となく浮かない顔。しか郡六はそんな事にお構ひなく、再びデタラメに、太鼓を三つ四つ打ち打ち試みる)

聲 あい、今日は！ (キンキンする様な大聲をあげて、通路の奥に現はれ通路を通つて庭の方へ廻つて來るお源(三十六七歳。吉春の妹。この邊の農家の女房には見られない派手な着物を着、頭髮や帶や下駄の好みが、田舎式ながら思ひ切つてゐて、なにやら鐵火である)が、叔父の小次郎(従つて吉春にとつても叔父、七十過ぎ。この邊の老農の常で、過勞の爲に、齡より非常に老けてゐて、鍛へ込んでガツシリとした身體つきのまゝヨボヨボになつた老人。着慣れない晴着に黒の紋付を着て、右手に握り太の鐵扇を持つてゐる)の手を引くやうにして入つて來る)

郡 六 やあ。南のお旦那。さあさあ――。

源 それで、なにかな、小宮山さんの衆はまだ來ないの？ (この女には自分一人でのみ込んで、人の返事を待たないで、話をドンドン進めて行く癖がある。邊りを見廻して一人で領き)へえそうかな、まだぢね。だって、四時だつて云つたぢやないの？ もうそろそろ四時だに、遅いちぢやないか、ねえ兄さん！

吉 春 ん、その……。

源 そいで嫂さんは？

郡 六 (吉春がモダモダとして返事をしないので、引取つて)姉きは、婦人會の仕事で、ちよつくら停車場まで行つて來るといつて、さつき寄つただから、もうへえ、すぐに戻りますよ。

源 (小次郎を助けながら、六疊に上つて行く。そこへ、お盆に一同の茶を乗せたお雪が出て来て、それぞれに茶を配る。そのお雪を見ながら) へえ、綺麗に結へたな雪ちや、へえ、これは似合ふ! もつと早く來よう來ようと思つてゐがら、つい店の方が忙がしかつたのが、今度又うちが縣の土木工事を請負うてしまふてね、いやもう、忙がしいのなんのつて、身體が二つあつても三つあつても足らん。そんなでも、やつと都合して今日はやつて來たが、二時半の上りで來て、南へ寄つて今までいろいろ話を聞いてゐたが、そんなになにかな……小宮山のその少しボンヤリした人にかたづけけるちうのは、そんなにはつきりもう決つたことかな? (あとの半分は、兄の吉春に向つて云ふ)

吉春 さん、いや、そのお紋がな、決めるちうて……(相變らずテキパキしない。盆を持つて爐邊に引下つたお雪はコソコソと立つて納戸部屋へ消える)

郡六 (再び話を引取つて) いえね、それがね、ぢやから今日はまあ嫁見といふことで、先方からも人が來て本極りの盃にしようといふんぢやから、當家としても、まづまづお目出度いといふわけですよ。ハハハ。

源 (ムツとして) なにがお目出度いんです? 一色の本家の娘が、たかゞ近頃成上り者の嫁に行く——私あ反對ぢや、大體兄さんが——(云ひつのりかける)

小次郎 ……(先程から喋つてゐる人達の口元ばかりマヂリマヂリと見位べていたが、やおら眞四角に坐り直して、ポカンとして坐つてゐる吉春へ向つて、疊に手をついて堂々とお辭儀をしてからこんなたびは本家のお旦那、お目出度いことしつややくで祝着しつややくでござす(儀式張つた祝辭。吉春は、受け兼ねて、これも坐り直したものゝ「これはこれは………でござす」と何やら口の中でモゴモ

ゴ云つて辭儀を返す)

源 (その小次郎の袖を引き張つて) だからさ叔父さん、私は、話が呑み込めん。こんなことでは呑み込めん。

小次郎 うん？ んだが、先方の衆が見えんうちに呑むわけにも行かんぢやらう。(この人は耳が遠い)

郡 六 アツハハハハ、ワツハハハ。アツハハハ。

小次郎 あんだ？(キョトリとして、笑ふ郡六を見る)

郡 六 そうでやす、そうでやす！(小次郎に向つてガクリガクリと頷いて見せて) アツハハハハ。

源 ……(郡六をギロギロ睨みつけてゐたが、その笑ひ聲をたゞき切る様なキンキラ聲をあげて) あんだけ綺麗に生れついた娘を、こんな田舎で埋もれさせるのには反對ぢやと初めからわしは云ふとるのに、嫂さんも話がわからなすぎる！ なあ兄さん、わしがこれほどうちのことを心配しておるのに、わしにはろくに相談もしないで事を運んでしまふのは、ナンボなんでもあんまりぢやないかな！ 今時、いくら身上がよくても、こゝらの百姓のうちにかたづけいたつて、行先、面白いことはありやしませんぞ？

郡 六 ハハハ、そいぢやあ、雪ちやん町へ連れていつて、請負師にでもかたづけやすかかね？

源 だれが請負師にかたづけると言ひやした？ だけど、あれだけに生れついておる娘を町へ連れていけば、又どんなよい話でもあらうからと、うちの松本もそう云つて――。

郡 六 だども、わしやこれで、町へも始終行くが、どこへ行つてもなに商賣でも、へえ、かう

いふ御時勢になつて、もうへえ、面白いことはありませんな。そんなことよりは、かうなるてえと、食ふ物こしらへてる百姓が一番強えわけで――。

源　そりや郡六さんみてえに農具やなんかの仲買で、サヤを取つて儲けてゐる人は、段々仕事も面白くなつて來るでせうがね――それもしかし、まあ、人のカスリを取つてやつてゐる様なもんぢやから、云つてみりや當り前。だけど、これで、まだまだ目のつけどころと自分の働き次第で、町へ出りやいくらでも穴はある。又、それでなくちや世の中は、面白く無いわけで――。

郡　六　（お源の言葉にムツとするが、忽ちヘラヘラと笑ひ飛ばす）へへへへ、そりやもう、なんだらうけど、カスリを取つて生きてるは少しヒドイなあ。へへへへ。

源　そうぢやあないですか？　よ、そでこしらへた稻こき機械などをあつちからこつちへ持つて來ちやあ、二倍三倍の値で賣りつけるのがあんた方の商賣ぢやもの。慣れてみりやこんなボロイ商賣は無いわけ。

郡　六　（お源の言葉がだんだんカサにかゝつて來るので、笑つてばかりもをれなくなつて來る）そんなこと云やあ、お宅の松本さんなども、これで、縣廳あたりの仕事を請負ふて、二倍三倍はおろか、五倍も六倍も儲かるんでせうが。しかも何一つ自分が働くんぢやなし、土方や大工左官を顎で使つて上の方の人には酒でも飲ましてペコペコしてりやあ、それで濟むんぢや。

源　　なんですつて？　うちの松本が、いつペコペコしやした？　そりやあ、交際合ひが廣いから酒は飲みます。しかし、ペコペコなんど、そんな――。

吉　春　（口論になりそうなので）まあ、まあ、お源――。

小次郎　（先程からお源と郡六の顔を見位べてゐたが、どうせ聞えるでもなし、疊の上の獅子頭

に眼をうつして、本家のお旦那、吉兵衛獅子はやつぱしえゝのう！（耳の遠い人の常で、少し語韻の狂つた頓狂聲）一つ拝見しやうか？ 太鼓はわしが打たう。久しぶりぢや。

吉 春 へい。んでも……（なにやら險惡になつて來たお源と郡六の様子に氣をとられて、うわの空の返事）

源 ……（その間、郡六をヂツと睨んでみたが）聞かうぢやありませんか。うちの松本が、誰にいつペコペコしましたな？ これでも町では五本の指に入る請負師ですからね？ そんなことを云われちやあ——。

郡 六 （相手をさへぎつて）だがそんなことよりや、お源さんは何かと云ふところの姉や、わしを目の仇にするが、そりや、あたしにしてみるとこゝの姉はたつた一人の實の姉ぢやけん、何かにつけて力にならうとは思つとるけど、お源さんもこゝの姉や、私のすることに、何かから何までタテをついて來るのは、これ、あんたの小姑根性——。

源 （相手をさへぎつて）そうだよ、小姑だよ。小姑であらうとなんであらうと、本家の一大事ぢやあと思ふから、かう云ふのが何が悪いんですかね？ 何を云つていやがる、全體な

郡 六 なんだと！

（二人の間が色めきわたつたところへ、表口にビツクリする位の大きな「エツヘン！」と咳拂ひの聲が聞えて、そこから静かに入つて來る二人の人影が先に立つたのが小宮山の彦造（四十八歳）。小地主で、自身農作はせず、役場の書記をつとめてゐようといふ穩

やかな弱々しい人柄の男で、紋付袴の禮装。風呂敷に包んだ贈り物の大きな箱を、大切にそうに左手に抱へてゐる。あとののは小宮山お節（五十四五歳。地主小宮山家の當主の妹で、よそにかたづいてゐたのが後家になつて實家へ歸つて來て以來、家事一切を取締つてやつてゐようといふ非常なシツカリ者だが、口數の至つて少い女。これも古い小紋の禮服に黒の紋付姿）。二人の姿にお源と源六の口論は不意に打切られ、一同そちらを見て一瞬黙り込んでしまふ。主人の吉春はどうしてよいかわからず口の中でもモゴモゴ言つてゐる。獅子頭をためつすがめつ見てゐた小次郎も、吉春の視線を追つてユツクリと土間の方を見る）

源 ……（今までの彼女の言葉から推すと、このお客など見向きもしまいと思はれてゐたヤツが、反對に不意に笑みこぼれる様な愛嬌で立つて行き、板の間に両手をついて）これは、これは、まあ、小宮山さんの皆さんでございませうか。まあ、ようこそ。さあどうぞ、お上んなすつて、どうぞまあ——（その變り様がヒドすぎる）

郡 六 ……（その様子をヂロリヂロリと見てゐたが、不意に、低いが、しかしお源には非常に鋭い嘲笑として響く笑ひ聲を洩らす）ハハ……へへ……へへ……フ！

源 ……（その郡六の方を噛みつくやうな眼つきでヂロリと見据えてゐたが、やがて來客の方へ眼をうつし、それから四邊を見廻したあと、まるで今まで愛嬌よく對してゐた二人の客が、自分の眼の前から掻き消えでもしたかのやうに、出しぬけに無愛嬌なムツとした顔になり、ツト立つてスタスタ座敷の方へ引返して來て、勝手な所に坐り込

んでしまふ。郡六の方も今までの行掛りで、急に立つてお客を迎へるわけにいかず、かといつていつまでも捨てゝもおけず、困つて、薄笑ひを浮べながらマヂリマヂリとしてゐる）

吉春 ……（仕方なく立上つて、怖いものにも近づくやうに、板の間の方へ出て來て）これは――。

小次郎 これはこれは。小宮山の御分家の彦造旦那に、お妹御のお節様でござすか。わざわざどうも、恐れ入りやす。（耳の聞こえない一徳でこの方は少しも動ぜず、吉春の後ろから出て來るや板の間の眞中に坐つて眞四角な辭儀）

彦造 これはこれは、南の御新家しんやの小次郎旦那でやすか。どうもへえ、わしでは荷が勝ちすぎると思ふたが、どうしても言はれでな、本日はかうしてまかり越しやした。

（儀式張つて云ふ）

お節 まずまず、手をあげられて。本日はお嫁見を私が仰せつかりまして。（これもシヤチコ張つてゐる）こちらは、いづれお式の時には、仲人になつていただゝく筈でやして。――まづまづ……。

郡六 （お源とやり合つてゐた気分からやつと回復して、立上つて來て、必要以上に愛想良く）さあさあ、挨拶はそれ位にして、お上り下すつて。（手を取らんばかりにして二人を座敷の上へ招じ上げ座蒲團を敷き並べる。たゞ一人お源だけが、坐つたまゝどこを風が吹くといった顔で、帯の間から巻煙草を出して吸いつける）

小次郎 まづまづ、こちらへ。いや、あなた方がそこへ坐つて下すつてはわしらが困る。

さあさ——（彦造とお節を上座に据える）本家のお旦那よお前——。

吉 春 （その邊をウロウロしてゐたのが）やあ、どうも、へえ……なんしろこの

——（やつとのことで縁側に近い座蒲團の上に坐り、どうしてよいかわからずイライラしながらも、例の調子で側はたから見ると、キョトンとしてゐる）

郡 六 （その間も座敷と爐邊の間をチヨコマカと往復して、それまでに爐邊に用意してあつた黒塗りの平膳の上に、簡単な肴の用意があつたのを、座敷に運んで来て中央に据えたり、徳利の酒を爛瓶にうつしたり、一人で忙しい）……えゝと——（更に座敷にとつて返し、三寶の脇に置いてあつた。銚子を取つて立ちかけながら吉春に）兄さん、そいぢやあ、定りぢやから、お茶あよしてすぐに酒にするで——（吉春が頷くのを見もしないで、スタスタと爐邊へとつて返し、その邊をキョロキョロ見廻すが）えゝと、お源さん！ お源さん！ すまねえけど、一寸手を貸して下さいよ。お源さん！
源 ……（黙つて不承々に立上り、爐の方へ歩いて行く）

お 節 それで、なんでやすか、こちらのお内儀さまは——？（四邊を見廻す）

吉 春 一寸その、へえ、間もなく……（その邊に紋があるのを、捜してもするやうにキョロキョロする）

小次郎 なにかの、あゝん？

お 節 いえ、まづお内儀さまに御挨拶せんならんで——。

小次郎 そうでやす。へえ、本家が南の屋敷を引拂つた時に、まあ一時しのぎに立てた家でがして、もうへえ、古くなつてこの通りでやすが、いづれまあ、なんとかせななり

ませんけどな。（この家の普請のことを云つてゐる）

彦造 ハハジャ、ハハハ、いやもう……しかし、なんでやすな、今日はお日柄もえゝし、結構でやした。實はこちらのおかみさまから、きめる事は一日も早く本ぎまりにして安心したいからと言ふんで、先日から何度もお話が有りやして、そんでまあとりあへず、私等がこうして、なんでやす——ハハ。

小次郎 當家もいよいよこれからでやすから、娘がかたづいて長男が凱旋でもしたら、早速間口の二三十間もある、大屋臺でも建てやすかな。ワツハハハハハ。（これはまだ普請の話。齒の抜けた口を開いて老人の豪傑笑ひ。彦造もお節も吉春も、仕方なしに笑ひ出す）

郡六 なんでやす？（酒を注いだ銚子を持つて座敷へ來ながら、これも、意味は分らないながら、調子を合せて笑ふ）へへへ、だども、とん角お目出てえ。こゝの雪といふ娘は……自分の姪つ子のことをわしが云ふのも變なものでやすが、氣立てのいゝ娘でやしてね。さあ、一つ、おあげなして。まだ冷たうがすが。（先づ彦造の前に三寶を据える。彦造シカツメラしく、その上の大形の酒盃を取る。郡六酒を注ぐ）

お節 そいで、娘御さんは——？

吉春 ……お雪！ ……お雪よ！

郡六 （彦造が飲み干して置いた酒盃を、お節に廻し、酒をすゝめる。以下次々に、小次郎、吉春と酌をする）なんにしても、こんなお目出てえことはねえです。わしやこんで、子供が無えですからね。小せえ時からこゝの姪のことは、自分の子のやうに可愛

ゆうがして、こんたびのことも、わしやもう嬉しうて嬉しうて。

源　フフフフ……（それまで爐邊に片膝立てに坐り込んで、くわえ煙草で爛瓶を、

鐵釜の中に突込んだりしてゐたのが、座敷の郡六の言葉に低く笑ひ出す）フフ！　ハハ。

お節　……（その笑ひ聲にフト耳を取られて、その方を覗くやうにする）

郡六　そんなわけで……（そのお節の視線を追ふのと同時に、お源の笑ひ聲が耳に入り、急にムツとして、そちらを睨みつける）

（そこへ、表口に足音がして、ハアハア喘ぎながら、お紋が走り戻つて来る。白だすきと白の割烹着を脱ぎながら、サツと土間へ飛び込んで来る）

紋　あゝ……（上氣した顔で爐邊のお源をチラリと見、土間に脱いだ下駄に眼をやり次に奥座敷の方を見て、一邊にすべてを理解して、急に相恰をくづして、ニコニコしてお源を見ながら、上にあがる。

源　……（笑ひ聲を引つ込め、ムツとした顔で嫂の笑顔を迎へやうとせぬ）

紋　（そんな者の相手になつてゐる暇は無い。衣紋をつくろひながら、最上の愛嬌顔で座敷へ）こりやあまあ！　こりやあまあ！　皆さんお出でなのに、つい留守にして、失禮致しやして。

なんせ、へえ！　婦人會の班長などやつてみますと、これで忙しうがして。なにね、三時の下りで、傷痍軍人さんが一杯通過しやして、まあそれを、接待するちうて――。

彦造　それはそれは御苦労さんで。

紋　いゝえ、苦勞のなんのと、そればかりはわしらのつとめでやすから、へえ、たとえ内にどんな事が有つても、出ないといふのは相濟みませんで。國がこんな風に、上から下までソ――

リヨク戦やつとるのに、自分一個の都合だ何だのと云ふのはまちがった話でやして、大げさに云へばそんな衆は、先づ非国民でやすからね。ハハ（と漢語を使って言ひ放ち、気持ちよさそうに笑つてから、彦造とお節の前に改めてキッチンと手をついて頭を下げる）ようまあ、お運びで、この度はお世話さまでござります。

彦造 お先にいたゞいでいるやうなわけで……（抱えて来た風呂敷包をほどいて、奉書で包んで大きな箱入りの贈り物を前に出し）これは、甚だ粗末なものがすが、お納めを——いづれ結納は結納で、チャンと致すようになつとりやすから。

紋 これはまあ、御叮嚀なあゝた。

吉春 （お紋が入つて来て以來落着かず、中腰になつたりオドオドしていたが）これはどうも、へえ——（奉書の箱を見るのも上の空）

お節 まづまづ……（これがこの人の口癖のやうである）こちらのお旦那に少しお酌をさせて貰ひませうか。（銚子を取つて吉春の前へ進み出て、大盃を取り、浮腰になる吉春を押へつける様にして酒盃を持たせ、酌をする）

吉春 いや……へえ……（ほとんど無意識に矢つぎ早に注がれる酒を、三杯、四杯、五杯と飲み干す。眼は心配そうにお紋の方へ注ぎながら）

小次郎 （お紋がその前年祝えて覚れた奉書の箱を、謹嚴な態度でためつすがめつ見ながらうなつてゐる）、フーン、これはこれは、御叮嚀に。（箱に向つて頭を下げる。これに對し辭儀を返す彦造）

郡六 （丁度その時、お爛のついた爛瓶を二三本乗せた盆を持つて座敷に引返して来たのが、

彦造に向つて）さあさあ、お一つ。（彦造に酌をし、それからあとの二本の爛瓶をお節の手元へ持つていつてやり、次に小次郎に酒盃を取らせ、酌をする。お紋は彦造の前へ行き酌をする。その間も吉春はお節から注がれるまゝに、矢つぎ早やに大盃をかたむけている）

彦造　ハハハハ。ハハハハ。あなたも一つどうでやす、お内儀さん？

紋　いえ、わたしや不調法でがして。へへへ。

お節　だども、郡六さの小旦那もチトあがりやして。

郡六　いえ、わしや、あとでゆつくりいたゞきやすから、へえ。

小次郎　なんせ、目出度い！（この老人は酒に弱いやうで、二杯ばかりの酒がもう廻つて來たらしい。鐵扇を持った手を宙にフラフラと振り廻す）

彦造　時に、どうでやす。ソロソロお嫁さんを拝見しやせうか。ハハハハハ。役目がすまんうちに酔拂つてしまふては相濟まん。

紋　へい。一寸仕度をさせやすで、チヨイとお待ちを。（立つて板の間の方へ出て行き、爐邊をキヨロ／＼見廻す。そこには先程から坐つたまま二三杯の酒をひつかけたお源が、再び火をつけた巻煙草の輪に吹いてゐるだけ）……お雪……雪はどこへ行きやつたかなあ？

源　……（嫂をチロリと見上げるだけで返事をしない）

紋　……（義妹の顔に一寸視線を止めるが、フンと云つた調子で板戸越しに納戸部屋へ向つて）……なにしてるだ？　雪や！（納戸部屋から返事が無い）

源　……（座敷の方へ聞えないやうに、押しころした低い、しかしねばりつくような聲で）私はこの話には反對ですよ。……たかが相手は、十町かそこらの小田地持ちの、百姓ぢやありま

せんかな。しかもお婿さんといふのは、薄馬鹿だと言ふぢやないの。自分の娘に行先のことを考へたら、あんな氣の弱い娘をまるで手取り足取りして賣りつけてしまふやうなことをするのは、あまりなんでも——。

紋 ……（立つたまゝかみつくやうな眼をして相手の言葉をきいてゐたが、やがて青い顔でニヤリと笑つて、これも押しころした低い聲で）フン！ だれが手取り足取りして、無理に行かそうとしましたたな？

源 だつてそうぢやないの？ 雪ちゃんは、そんなところへ行くの望んどりやしませんよ。この前私が來た時に——。

紋 自分の娘の行く末を私が私が考へてゐませんか？ 何を證據にあつた言ひますな？ あつたはうちの雪を連れて行つて、自分のいゝやうに思ふとるもんぢやけん、そんな根も葉も無い云ひがかりをつけて——。

（その間も座敷の五人の間には、さしつさゝれつの献酬が續いてゐる。中にも、かねてこの中では一番の飲手として認められてゐる吉春は、一番飲まされてゐる）

郡 六 アツハハハハ、ソラソラ兄さ、いくら禁酒だと言つたつて、今日だけはえゝさ。天下御免！ アツハハ。

お 節 そりやそうですよ。ホホホホ！（酒を注ぐ）

吉 春 （次第々々に酔つて來てゐる）いやあ、どうも、だども、久しく止してゐたで、もうへえ、いけねえ。

小次郎 ワツハハハハハ、ワツハハハハ。（老人少し笑ひ上戸の氣味あり）

(爐邊ではその間睨み合つてゐるお紋とお源)

源 全體お雪についてはこゝの吉男が出征する前に、私に言ひ置いて言つたことがありますからね。

紋 お源さん、私は親ですからね。お雪の親ですからね！ 親が自分の子の行く末を幸せを思ふてすることを、はたからグチャグチャ云ふんだつたらそんな人は親戚でもなんでも無え！
そもそも、この話といふもんは――。

(こちらでは、小次郎が手に持つてゐた鐵扇をサツと開く。眼のさめる様な日の丸の扇)
小次郎 あい、皆さんお手を拝借しやす。(日の丸の鐵扇を大きく打ち振りながら、調子の外れた洞間聲で、田植歌と御詠歌との合の子の様な間の抜けた節の歌を歌い出す。他のもの達は、ユツクリとてをたゞいて拍子を取る)

フウキといふも、 草の名。

メウガといふも、 草の名。

富貴満腹 徳ありて、

冥如あらせ 賜はれや。

(この邊で祝ひ事や、酒宴の際に歌ふ今様。も一度歌ふ。今度は他の一同も唱和する)

フウキといふも、 草の名。

メウガといふも、

草の名。

富貴満腹

徳ありて、

冥如あらせ

賜はれや。

(このおそろしくダラダラとした歌の合唱の中に、この家の次男の春二(十二三才)が肩から下げた鞆をブラブラさせながら、通路の方から歸つて來、庭の方へ廻つて出て、縁側に近づく。元氣そうな頬の赧い、しかし、父親似でのんびりした性質らしく、思いがけない酒宴の風景にあつけに取られて、口をポカンと開けて眺めてゐる爐邊では、お源とお紋がまだ何か云ひ合つてゐるらしいが、歌声に消されてきゝとれない)

吉 春 よしや！ はははは、よしや！ (いよいよ酒の酔が廻つて來たと見え、今までの彼とは道がへるように生々とした眼色で、歌が終るとイキナリ立上る)

彦 造 ハハハハ、それぞれ、吉兵衛獅子の始り始り！ ハハハハ！

小次郎 やるかの本家のお旦那？ ぢやあ、おらが――。(これは太鼓を引寄せてバチを搦む)

お 節 まづまづ、一色のお獅子も久しぶり！ 頼みますよ！ (郡六がむしように手を叩く)

吉 春 なあに、へ！ (身體をユラユラさせながら、その邊を睨み廻す様にして立つてゐたが、やがてフラフラと歩き出す。獅子頭の方へではなく箆笥の方へ。箆笥の上に乗つてゐた虎骨酒の壺をつかみ座へ戻つて來る) これでがす！ これでがす！ 今日ひひとつ、これを頂くだ。これは滿洲の酒で、虎骨酒と言ふてな、虎の――(言ひながら座敷へ入つて來かけたところで、袴の裾を踏みつけ、前へヒヨロヒヨロとのめつて行き、お節の上に折れ重なつて倒れる) オツトツト、

ダア！

お節 ヒヤア！

（その聲で、爐邊のお紋とお源がびっくりして座敷の方へ来る。庭に立つて見てみた春二がゲラゲラ笑ふ）

郡六 ホウ、こりや！ アツハハハ！

紋 どうしやした？ どうしやした全體——？

お節 なあに、なんでも無え。ハハハ、どうも！

吉春 ドツコイセ！ この——（モガモガしながらやつと起上がる。この鈍い男が、ヒツクリ返る時にも虎骨酒の壺だけは宙に差し上げる様にして、一滴もこぼさず持っていたやつを、高く差し上げて示しながら）大丈夫、大丈夫、この通り、この通りじゃ。アツハハハ！

紋 （それまでの、お源との口論の怒りもあり、眼を三角にして）なんですか、ああた！小宮山さんのお内儀さまに對してそんな失禮なまねをして、全體、あゝた、なんでござります。

吉春 えゝわい、えゝわい。

紋 えゝわいぢやあ、ありませんよ！ そんな事をして！ これから、あゝた、お雪を皆さんに見ていたゞかんならんのに、あゝたからしてそんなざまを——。

吉春 雪？……ざまがどうしたよ？（キヨロンとした眼で妻を見る。それまでにあほりつけた酒の酔が、ヒツクリ返つたので一度に發して來たらしく、モウロウとした眼で、しばらく妻の顔を見上げてゐたが、この時、だしぬけに火の様なもの、彼の全身を貫き走り、眼の色がカツと光るや、凡そこの男から誰も豫期してゐなかつた様な、猛烈な大きな鋭い聲が飛び出す）ざま

あ？　ぎまたああんだ？　ぎまたああんだ？　雪？　雪がどうしたと？　雪はお前の子かも知れないが、おらの爲にも娘だぞ！　あんまり大きな顔をするのはよせ！　俺が、年中遠慮をしてゐるといゝ氣になりやがつて、お紋、お前の仕様はなんだと言ふだ？　全體お前なんか、人のツラさえ見りや、えらそうな理屈をこねにかゝちよるが、へえ、お前の肚ん中なんてえものはな、全體あんだよ？　理屈もえゝ、説教も結構だ。だども、そいつが見榮外聞だけで、肚ん中と違つてゐたらどうなるんだ？あゝん？　やいこら！　（少し酒亂の氣味である）

郡　六　まあまあ兄さん！

吉　春　全體、お雪のことにしてからが、お前の肚ん中は、つまりが、あれを小宮山さんへかたづけてこの家の田地を増やしたり、村でえゝ顔にならうという量見が先で、當人の幸せがどうならうと、當人の氣持がどうあらうと、そんなこたあ二の次にも考へちよらん！（困つたことを口走り始めたので、郡六と、それからこれはよくは開こえないが、小次郎も、まあまあと吉春の肩をつかんで止めにかゝるやつを、ふり切つて）俺あ知つとるぞ！　俺あ知つとるぞ——お雪はな、お雪は俺に似て、氣が弱くて、思ふとることもよう云へん。それをお前一人が、自分一人の欲の皮を突張らした量見で以て、ドンドンドンドン話を運んで——。

郡　六　まあ、まあ、まあ、まあ、兄さん、まあ、まあ、まあ、お前酔つとるで、そんな——ハハハハ！　（吉春の言葉をもみ消すやうに大きな聲で笑ひ飛ばしてから、お節と彦造をかへりみ）なんせ、十二月八日からこつち禁酒をしてゐやしてね。一たらしも飲まんかつたのが、急に、こんなに飲んだのでやすから、ハハハハ。（お紋は、吉春からだしぬけに喰つてかゝられてドギモを抜かれ、青い顔をして突嗟には何も言へないである）

お節 ホホホホ、オツホホホホ！

彦造 ワツハハハ、無理もねえ、無理も無え。ワツハハハハ！

（この二人も、自分達の立場上今更になつて、吉春に妙なことを言ひ出されては困るので、眼ではキヨロキヨロと皆を見廻しながら、聲をそろえて笑ふ）

吉春 なにが無理はねえです？ なにが無理は無え？ おい——。

小次郎 まあえゝわい、えゝわい！ （吉春に大盃を持たせ、虎骨酒の壺から注いでやる。吉春、勢ひよくよくそれを飲むが、強い酒だとみえむせる）

彦造 ハハハハ、ハハハハ！

源 ちよいと嫂さん。（お紋の袖を引いて板の間の方へ連れて行こうとするが、お紋はチロリとそちらを睨むだけで動かない）

お節 それでは嫁御さんを見せていたゞかうぢやあございませんか？ （捨てておくと收拾がつかなくなりそうなので、彦造に目配せをしてからお紋の方を見る）

彦造 左様々々、お内儀さん、そういふことにひとつ——。

紋 ハイハイ、それでは——（お源をしり目にかけて板の間の方へ行き、納戸部屋へ向かつて）お雪！ お雪！ いつまでも何を——（言ひながら板戸をガラリと開けて納戸部屋へ消える。

そこで一寸の間マゴマゴしてから、今度は奥座敷への板戸を開けて出て来る。びつくりして慌てきつた顔）お雪や！ お雪！（その様子に、一同がそちらを見る）

彦造 ……どうしやした？

紋 ……（それに返事をする餘裕の無いほど慌てゝゐる。キョトキョトとその邊を見廻しな

がら、小走りに板の間の方へ行き、彼方此方を見廻し二三度ウロウロした末、土間へ下りそうにするが思ひ返して再び納戸部屋へ入つて行き、直ぐに又奥座敷へ出て来る）お雪！（叫ぶが、別に、それ以外に隠れる所とてない家のうちなので、最早のぼせ上つてしまひ、今度は逆に、奥座敷の方から納戸部屋へ飛び込んで行き、板の間の方へ出て来る。その様子が、二十日鼠がかけまはり始めた様である）お雪や！

春 二 ……ねえちゃんは、停車場へ行つたよ。

源 ……なんだつて停車場？

紋 停車場？ ……停車場だつて？ だつて、停車場なら、わしも先程停車場から歸つて来たんぢやけん、途中で逢ふ筈ぢや。

春 二 うゝん、裏道から行つた。おれ、學校からの歸りに裏道通つてゐたら？ 停車場の裏で、ねえちゃんに逢つて——。

紋 （一邊にギツクリして）え！ そいで、そいで、そいで雪、なんか——？

春 二 うゝん、他所行きの着物着て、風呂敷包み持つて、怒つた顔してた。そいから俺に、春ちゃん、あとは頼むよと言つた。

（一同ギツクリして、中には中腰になつた者もある）

彦 造 全體、こりや……。

紋 （動顛して言葉も出て來ない。あへぎながら）それで、それで——えゝい、早く言はんかい、春！

春 二 （自分ではなんでも無い事を言らたつもりなのに、皆の驚き様があまりに大きいので、

それを見て自分もかへつてびっくりして）んでな、んで、鏡臺の引出しを開けて呉れて。お母ちゃんに、鏡臺の引出しを開けて――。

（お源が何も言はず、鏡臺の引出しを開き、そこに突込んであった紙片きれを取つて走り読みする。読み了つて、何も言わずお紋に渡す。お紋それを読もうとするが眼がチラチラして読めない。そこへ郡六がやって来て、お紋から紙片を取り、黙読）

郡六 ……満洲へ、行つてしまつた。（早口に讀む）お父さん、お母さん、どうぞ許して下さい。私は圭太郎さんと一緒に行きます。親不孝の罪はどうぞ許して下さい。

（一同、しばらくの間息を呑んでシーンとしてしまふ……間）

小次郎 ……どうしたや、あゝん？（その聲が四邊につゝぬけにひゞく）

吉春 そうかつ！ そりやえゝ！ そりやえゝぞ雪！ そりやえゝ！（飲んでゐた虎骨酒の壺を、放り出して立上つてゐる）

お節 まづまづ、こりやあ――（なんと云つていゝか、わからずにゐる）

紋 （不意に踊り上る様にしていきり立つて）こりやいかん！ 圭太郎なら四時の上りぢや！ 郡六、早く行つて、早く行つて連れ戻して来て呉れ。警察にそう云つて、畜生！ 何たらいふ――早くするだよツ！

郡六 だども、だどや――（腕時計をのぞいて）四時の上りなら、もう間に合はん！ もう、發車しとる！

紋 そいぢやあ、そいぢやあ次の驛へ電話かけて――。

吉春 もうえゝわい！（どなりつける）雪がそうしたんなら、そいつはよくよくのことぢや

！騒ぐな、もうえゝわい！　よくよくのことぢや！　騒ぐと俺がきかんぞ！

彦造　だども、こりやあ、へえ……これぢやあ、わしらの立場はどうなりやす？

（下手遠くから列車の膏が近づく）

春二　ホラ、四時の上りが来た。

紋　（目がつり上つてしまひ、はだしで庭に飛び下りて来る）あゝ行つてしまふ！　雪が行つてしまふ！

吉春　アツハハハハ、それでえゝわい！　吉男も以前、お雪は圭太公の嫁にやるんだと言いつた。それでえゝわい！　（意気昇天の勢ひでその邊を見廻した眼が、獅子頭へ行き）ようし、んだらひとつ、舞つて見せてやるか！　お雪が見たい見たいと言いつたけんな。ようし見せろ！　（いきなり袴のもゝだちを取るや、小次郎の耳のはたに口を持つていき）小父さ、おらが舞ふで、太鼓頼むぞ！

小次郎　う？　……（キヨロキヨロ一同を見廻してゐたが、この場の事情がよくは呑み込めず、バチを取る）だども——（吉春は獅子頭を頭からスポリと冠り、庭へ飛んで下りて、柵の前へ来てビシリと止り、舞ひだしの極りの形。一同アツケに取られてゐる。近づいて来る列車の響き）

吉春　お雪、よく見いよ！

小次郎　（吉春の姿勢にうながされ、しやうことなしに）ヨオツ！　（一つかけ聲をかけて、ドドンと太鼓を打つ。その音を押しかぶせるように近づく列車の響き。器量一杯に踊り始める吉春の獅子）

紋　お雪や！　お雪！　お雪！　（木柵につかまつて、今この家の下へさしかゝる汽車の窓

へ向つて叫ぶ） あゝ！ あすこに居る！ お雪！ お雪！ 行つたらいかん！ なんでもお前の好きなやうにさせるけん、行つたら、いかん！

吉 春 （ホロの下から顔を出して、これも聲のかぎりに、汽車の窓——つまり正面——へ向つて叫ぶ。しかし、上手へ向つて通過する轟々たる汽車の音にかき消されて、初め何を叫んでゐるかかわらないが列車が通り過ぎ行き、その音が低くなるに従つて、叫び聲がきゝ分けられる） お雪！ しつかりやれよ！ 幸せにやれよ！ あとのことは心配すなよ！ 人間一生の一大事の時、自分がホントに正直に、したいと思ふことを思ひきつてやらんならぞ！ それが人間の道ぢやあぞ！ それが人間の道ぢやぞ！ 圭太郎君と仲良くやれようつ！ お父つあんは嬉しいぞう！（叫ぶ叫ぶ）

紋 お雪！ お雪ようツ！（居ても立つてもゐられず、柵から手を放すと、脱兎のやうに通路から縣道の方へ走り出て行き、上手、汽車の去つた方向へ、あとを追ふやうにして走り去る）
吉 春 アツハハハハ、それでえゝのぢや！

（柵の上へ乗り出すやうにして、さゝげ持つてゐた獅子頭の齒をガチガチと無意識に打ち鳴らしてゐたが、笑ひ聲と共に再びスツポリと冠り、庭中を法もへちまをなくキリキリ舞ひをする）

小次郎 ホウ！（獅子の狂ひぶりに驚いて、追ひかけて太鼓を打ち始める）
（茫然として突立つてゐる一同の姿。上手に遠ざかり行く列車の響き）

（をわり）

あとがき

三好十郎

一

芸術のことは、いくらむづかしく考へてみたところで、つまりが、いざやつてみやうと言ふだんになれば、自分の見たり聞いたり考へたり感じたりした事を、人に語つてみたい、と言ふ欲望に出發して、またそこで終る事からのやうである。

二

發願。そして、發願だけ。

三

一生忍んで思い死にする事こそ戀の本意なれ。——「葉隠」第二卷

四

流れ下つて來た溶岩。わきこぼれる泉。發射された銃彈。ふき破つて來る蕾。石をうがつ竹の

子。

五

それをするといふ事が、その人の運命になつてゐないやうな、そのやうな人はそのやうな事をよした方がよい。運命とは、その時その場でどうしてもさうせざるを得ないといふ事である。やむにやめない、それをしないと死んでしまふ、その様に追い詰められ決定された事である。是非と善悪を超絶し、どんな力でも阻止することのできない絶対の流れである。それが自然と生命の姿であり、そして、眞の力はそこからしか生れて來ないやうである。

六

人の顔さえ見れば説教しようとかゝつてゐる人々の氾濫。自分は、その他のどんなものになつてもよいけれど、説教者にだけはなりたくない。

七

この人だけは説教しないだらうと安心していつまでもその顔を眺めてゐられる人——兵士。あらゆる仕事に於ける、あらゆる意味での兵士。

八

演劇や戯曲が非常に役に立つものだと言ふ人が多い。文化主義者である。私は文化主義者ではない。いざと言ふ時に、演劇や戯曲など大した役には立たないと思つてゐる。

九

文字通り、やらせていたゞいてるのである。成敗を知らぬ。役に立つか立たぬかを問はぬ。問ふべきで無い。役に立つか立たぬかは、その後の話であらう。そして、それでこそ、或ひは少

しばかり役に立つこともできようかとも思われる。

十

たゞ、やるからには、なるべく叮嚀な仕事をしたい。自分などの思ふことは、それだけである。何の奇も無い大工さんや左官さんが自分の仕事について考へる事と同じだ。仕事を粗末にしては今日さまに對して相濟まないといふ氣持。「今日」の奥になにごとのおおしますかは知らぬまゝに、たゞその前に、しみじみと身を低くし、打ちくだかれた心を持つて行つて坐る。

十一

こゝに収めた「夢たち」「俺は愛する」「獅子」の三編——それぞれに、それを書く準備をし、そして書きながら、今更のやうに痛いほど自分の胸に來たことは、わが國民獨特の美しさであつた。作品の出來ばえには自信なし。たゞ、右の美しさの幾分でもが、どこかに生かされてゐたとしたら、どんなにか、うれしからう。

十二

「……この様に病弱では、たくさん作品をドシドシ書いて行くことはのぞめません。それに近來いろいろの理由から、自分の作品を進んで人なかに出して見やうと言ふ氣が動きにくい状態でありまして——あなたから叱られるだらうと思ひますが——當分の間、自分の氣持だけを本位として言ひますと、ボツボツと書いて行く作品を次々にあなたのお手元に届け、それがあなたが讀んで下さつて、その中で割に出來の良さそうな物だけを一本にまとめて貰ひ、こざつぱりとした装幀を選んでいたゞいて、一年に一冊づゝ位の割で次々に出版して貰ふ——そんなふう考へてゐるのです。身勝手な、ものぐさな量見ですが。「浮標」「三日間」それからこの「夢たち」

と、既にあなたに作品集を出していたぐくのも三冊目になり、あらためてお禮を言ふのも、今更
めいてかへつて變です。自分一人で、あなたと、それから讀者諸氏に向つて、頭を下げます。」

(櫻井さんへの手紙)

(昭和十八年七月記)

底本.. 「夢たち」 櫻井書店

1943 (昭和18) 年11月20日発行

入力.. 伊藤時也

校正.. 伊藤時也

2012 (平成24) 年2月29日